

永い後日談のヒーロー
アカデミア～黒絢を添
えて～

アルテリア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「エンブリオ」との一件を経てドールからネクロマンサーとなった「ダフネ」はエンブリオの領地を守護しつつ姉妹たちをサポートする活動をしていた。

しかし、荒廃した世界でずっと生きていられる程「ダフネ」は心が強くなかった。平和に生きる為に彼女は精神及び肉体を別次元に飛ばす計画を行動に移す。

結果彼女は人類がほぼ全滅した世界を離れ次元を旅し、一つの世界に辿り着いた。

そこは人類の大半が死滅し生き残りは宇宙へ旅立った世界で、地上には「アヴァンドナー」と呼ばれる機械と培養脳によって構成された存在や「エグゾーストフォートレス」と呼ばれる機動要塞と少数の人類のみが暮らしていた。

そこで「ジアド粒子」「ブレインファーム及びアヴァンドナーの作成方法」「A i r g e t - L a m h」などなどのこの世界の当時最先端の知識と作成能力を保持したところで再び世界間旅行を始めた。

次なる世界は、人類の8割が「個性」と呼ばれる特殊能力を持った世界だった。

「いや、それはもうヒトじゃないでしょ。別の種族名を名乗ってください、私の常識が崩れる…いや、割とマジで。」

※注意!!

・この作品の主人公は「ネクロニカ」のネクロマンサーです。

・ぶっちゃけ技術がチート級の世界から来てるのでオーパーツ使い放題。

・世界間旅行の時には荷物（「ネクロニカ」からはサヴァント、「アヴァンドナー」からは武装とかブレインファーム、そしてこの二つの世界の知識）も持ち込んでます。

・つぎはぎ本舗様のTRPG「永い後日談のネクロニカ」とどらごにあん様のTRPG「黒絢のアヴァンドナー」の知識が必要です。なくてもある程度説明しますが、知っていた方が分かりやすいと思います。

・もう一度言いますが主人公は「ネクロニカ」のネクロマンサーです。比較的には温情を与える事が多いし一般的な常識も持つてはいますが良心を期待しないでください。

・ 筆者は文才に乏しいので駄文である事が多いと思いますのでその辺別に大丈夫だよーって人のみご覧ください。

目次

【ダフネ：オリジン（1）】	1
【ダフネ：オリジン（2）】	9
【単語と設定】	17
【情報収集と散歩】	26
【緑谷という少年】	33
【ネクロマンサーもアリスも普通は前線で戦わないんですよ？】	39
【やったのバレたら無期懲役ものだよ、これ】	46
【雄英高校の入試！】	55
【入学式…じゃないんですか？】	64
【A組の担任は破天荒な人でした】	

【戦闘訓練の時間。その1】	73
【戦闘訓練の時間。その2】	92
【戦闘訓練の後日談とB組の人と会話】	101
【マスコミって常識がない人しかいないんですか？】	112
【レスキュー訓練…の前に乱入者です】	122
【敵との戦闘です。】	131
【広場の戦い】	140
【破壊の爪痕】	149

【ダフネ：オリジン（1）】

黄色い雲に覆われた空、油の膜に覆われた海に、突然降って湧いて来る嵐。地上は荒野が生物兵器の群棲地の二択。

恐らくキリスト教に描かれる「最終戦争」アルマゲドンが現実^{アルマゲドン}に起きた後の世界はこのような物なのだろう、と私は思う。

大量の機械が詰め込まれた廃墟のような場所……かつての「エンブリオ」の拠点であった場所を改装した部屋でキーボードを叩いてプログラムを作成していく。

「あくまで検証用のサヴァントだからなあ……余り物で適当に体を組んだ物を素体に、知性は原始的なものだけでいいか」

人格を一から作成して体にぶち込む。そんなぎい抜いだだが、事実余り物もとい失敗作で構成しているから手駒としての価値は0に等しい。

辛うじて人の形を保った異形に向けて起動を命令し、問題なく動けるかを確認する。

異形をあえて形容するならば、「左手はカマキリの如く節のある鎌状の生物のものに、右手は口のついた掌を持つ不健康そうな紫色をした不釣り合いなほどに大きく歪な腕に差し替えられ、腰から下はタコが如く8本の触手が足の代わりを果たすように蠢いて

いる。胴体からは飛べるのか怪しいが大きな翼の如き皮膚が背中から飛び出ていた。そして、それらの上に無垢な少女の首を二つくつつけている」といったところか。

我ながら悪趣味だと思うが、捨て場に困っていた物を投棄するのに極めて効率的なのでよく利用している。

精神に一部私の片鱗を埋め込む事で自我次元上で私と同期して（一方的にだが）情報を受け取る事も出来るから私はほぼノーリスクだ。

実験台との意思疎通も確認できた所で実験を開始する。

「さて、実験台223号。実はこの実験、これで129回目なんだ。どうか成功してくれ、僕は君に期待しているから」

128回目の定型文を口から出しつつ装置を起動した。この装置の原理を説明するならば、まず自我次元論から説明しなければならぬ。

自我次元論を簡潔に表すならば「私達の脳は『自我次元』と呼称されるある種の異次元との接触能力を保有しており、自我は自我次元との接触により発生した物である」という理論だ。

自我次元は平行世界というよりは集合的無意識のような概念だ。これに干渉するのは中々難しかった。

ちなみにこの理論は21世紀中頃に提唱され、証明された。

そして人類文明崩壊直前に自我次元との接触を人為的に再現する方法を発見し、「人格ダウンロード技術」が確立された。ちなみに発見者は私の親である。なのでこの辺の知識はその辺のネクロマンサーよりずっと詳しい。

第二に説明するのは「ブレーンワールド」もしくは「気泡」という概念だ。

ブレーンワールドとは私達の宇宙は「バルク」と呼ばれるより大きな囲いで覆われていて、私達の宇宙はバルクの内側にある「膜」であるという考え方だ。

このバルクの内側には理論上いくつでも膜を張れる……つまり宇宙が複数存在する事が出来る。例えるならミルフィーユみたいな感じだな。

宇宙を気泡と捉えるのも同様だ。コップの中に炭酸水が入っているとさえいいたい。

……まあ、並行世界の存在は確認できてる。自我次元への干渉実験の時に明らかに私達の世界とは違う荒野が映った事があるからね。

第三に量子論だ。

簡単にいえばシュレーディンガーの猫の「観測者が居ない限りにおいてはあらゆる可能性が同時に存在しうる」という事を利用する。

ここまで長々と説明しておいてあれだけど、簡潔に説明するならば「次元に穴を開けて対象を宇宙の外側に放り出す」という事だ。

ちなみに、今のところ成功例は0だ。

「はてさてどうなる事やら……って、ええええええええええええ!!」

突如として光が部屋中に満ちていく。訳も分からず昔みたく子供のようにつぶやいて光に抱かれる。

失敗で爆死かあ……あ、でもこれで家族の下に行けるのかな、とか適当な事を思っている内に意識が消失した。

「……ター！マスター！おきてー！」

「……あれ、生きてる？」

首を傾げながら私は起き上がる。部屋はそのまま、光に包まれる直前の状態のまま存在している。

目の前には先程製作したサヴァントが私を見つめている姿があった。体をぺとぺと触って異常がない事を確認する。

問題なく「ダフネ」の体である事を確認して息を一つ吐く。

「223号、何があったかわかるかな？」

「わたし、みたことないでしょ。マスターなら、わかるかも。かめらはつけてある」

ありがとう、と頭を両方撫でてお礼を言う。モニターへと近づいて外部カメラの映像を確認する。

私はこの景色を見た事があった。

「……はは、マジで言ってます？これ」

私は息を吸って叫ぶ。

「なんで施設丸ごとで転移しちゃうんですか!?!しかもよりにもよって地上汚染がヤバいから私達が活動できないとこじやん!移動できない、詰んだ!とりあえず生物兵器とか機械人形使って浄化と情報収集を試みよう!」

……はい、自我次元に干渉した時に見た世界でした。

確かこの世界の歴史を確認したところ、ある企業が「ジアド粒子」というとんでもなく毒性が強いけど強力なエネルギーを内包する物質を発見した事により色々あって地球が荒廃したって感じだった。

なんですか、私の行くところは世界が荒廃してないといけないんですか。

しかもこの世界の厄介な事は「ピグマリオナイズ」という厄介な病気が存在する事だ。ジアド粒子に触れた部分から一か月ほどをかけて陶器のような物質に変質する事によつて最終的に死亡する厄介な病(有効な治療法なし)……つまるるところ、生命体特攻の病気だ。

障壁で何重にも密閉している上にきつちり空気の清浄化までしてるからここに限りピグマリオナイズにかかる事は無いだろうが、調査の為には多少なりとも人員を派遣する必要がある。

「…………この知識を手に入れたらさっさと世界旅行しよう、そうしよう」
私はひそかにそう決意した。

ぶつちやけこの世界では情報収集と自身の体の改造、技術盗難しかなかった。

今の私の状況について簡条書きで説明しよう。

・後から調べたら私の本拠地は次元の狭間に位置しているみたい。ス〇ロボか？

・私の家は「世界の座標さえわかっていればその世界に入り込める状態」らしい。紅い瞳のオーブとサイン蠟石は持ってません。

・ブレインファームを基地に増設した。管理A Iは私の姉妹の一人「モルガナ（故人）いや、アンデッドな時点で既に死んでるわ。どちらかといえばM I A?）」に願っていた。お姉さま優しい。

・兵器をバラして構造を把握して原理を把握したおかげでこの武器が自分で生産で

きるようになった。ネクロマンサーって電子工学から生物学まで専門知識がたくさん必要で大変だね。そのおかげで兵器の構造が理解できたけど。

・私はアヴァンドナーになった。正確には私の人格をインストールしたアヴァンドナーを作った。ジアド粒子マジパネエつす。

・エンブリオを蘇生して味方にして、ESPを習得した。(ちよつと人格を改変して私の言う事は聞く胎児いはいこにしたけど)

・拠点を襲撃してきた美少女 Air-Brain 4 体を尊エンブリオの母胎い犠牲にした。彼も彼女達を気に入っていたので良いだろう。

・ニームハインっていい人。

・世界旅行にジアド粒子を利用したら装置が簡略化できた。というか私がこの世界に流れ着いた理由はこの世界からジアド粒子を引っ張り込んだ結果その流れに引っ張られたからっぽい。

・つまるところ、かなり安全に世界旅行が出来るようになった。第二魔法エ……

…… 過剰戦力じゃね？

この状況で世界旅行したらブレインファームによる人的資源の無限化、ピグマリオナイズを引き起こす大規模テロも起こせる(もちろん私の陣営にはジアド粒子中和システムを標準装備させたので効かない)、仮にアヴァンドナーが死んでも生命体である以上

アンデットの素材にできるし、しかも首魁である私はアヴァンドナーの兵器とエンブリオが使ってたESPが両方使える。

うん、これもうヤバいわ。

……まあ私の遊び場になってくれたまえ、次の世界！

【ダフネ：オリジン（2）】

本体であるアンデッドの私が色々次の世界旅行の候補を捜している間に自我次元を定期的に同期しているアヴァンドナーの私はこの世界の特殊な物を収集していた。

この世界に転移した数日後に突然現れた施設に関する調査で来た人達……いや、アヴァンドナーさんと平和的な話し合いの結果、幾つかの情報をもらった。

それを基に自分でブレインファームを建設、アヴァンドナーとして活動する為の私の身体を作成した。その後は兵器と情報の収集に努めて数年後。

ジアド粒子によって様々な機能の精度が上がったものの、平和な世界を捜すための「窓」では今のところ近縁の世界しか見つかっておらず、むしろ変な四足歩行ティンダロスの狐犬の動物が襲ってきた事もあった。

中々次の転移先が見つからないので、一度2223号に移住する世界の搜索を引き継ぎ私は息抜きにお姉さまの下へ向かう事にした。

「お姉さま、おはよう。今のところの調子はどうか？」

『うーん、今は身体がないから調子が悪い。サーバーの不調なのよね。サーバー的には絶好調、私の機嫌的にはちよつと不調って感じね。』

「アヴァンドナーの育成を私に放り投げないで欲しいわ。こういうのはリーダーの方が得意だったじゃない。」

「というか、ここの兵器のアヴァンドナーって生産効率悪すぎないかしら。一通り生産するのに最大で実時間で3年、体感時間では6年かかるって。いくら無垢な精神から一つの存在を作るとはいえ非効率だわ。」

「いっそのことAirBrainにしない？ 定型的な人格をコピーした回路を適当にぶち込んじゃえば後は身体を作るだけで済むわ。」

「生産に時間がかかりまくってるのに問題なくアンダーグラウンドの守護ができる時点でアヴァンドナーってチートよねえ。」

「お姉さま、ここは私達の世界程地獄じゃないよ。処女懐胎させたがる人はこの世界で闊歩しないし、汚染地域で平然と暮らす生物兵器もないから。」

「ブレインファーム「ファタ・モルガーナ・ラネズ」を管理するAI（本当はAIなんてちやちやな物ではないけれど便宜上そうしないと面倒だからそう呼ぶ事にした）であるお姉さまに話しかける。」

なんとも厨二なネーミングのブレインファームだが、色々とそういう事に詳しくかったお姉さまは初めて会った時から本名を名乗ってくれなくて、いなくなる最期まで私に教えてくれなかった。そして、今もまだ教えてくれない。

「お姉さまの本当の名前、知りたいなあ。もう教えてくれても良いでしょ?」

『ダメよ。私は私の名前が一番嫌いな。だからドールになった時は正直かなり助かったわ。本名を名乗る必要性がなくなっただけですもの。』

とはいえ、本当にヤバくなったら名乗るつもりだわ。まあ、だからと言って何かが変わる訳でもないのだけれど』

ならないのかい、と内心突っ込む。表情に出さない様に気を付けたが、それでも私は微妙な顔になってたようで後でお姉さまに散々笑われた。

『それにしても、最後に会った時から随分変わったわね。やっぱり私達のせいかしら?』

「んー……確かにそれは少しあるかもね。一人ぼっちになったら流石に私でもちよつとは狂うよ。正直なところ寂しくて発狂狂気点が満タンになりかけた。しそうになった。

できるなら他のお姉さまも蘇らせたいけど、アンデッドオーソルトマである事を肯定だつたしたお姉さま以外はなんとするか蘇らせにくいんだよね」

『アンデッドは兵器として実用化された時点で既に想像の範疇だったからすぐに納得できただけよ。体の無い情報生命体にされるとは予想も出来ないわ。心の準備のあるの

となしとでは結構違うのよ。

ところでこれって疑似的な監禁だと思うのだけれど、その点どうなんですか比較的良心的なネクロマンサーのダフネさん』

「それはごめんって毎回言ってるし、別に培養槽使って自分の身体を作ってもいいんだよ？お姉さまにはこの全権を任せてるんだし、私は何しても基本的に気にしないよ」
そういうえば言つてなかつた、と頭を掻く。

ESPを使つて近くの端末を手元に引き寄せて223号にチャットを送りながら会話をする。

『……貴方、もしかしてエンブリオを蘇らせてないわよね？ESPなんて一人でそうそ
うできるようなるものじゃないわ。

もしかして教えてもらつた後野放しにしてないよね』
「え？」

……ああ、彼と取引をしてね。私にESPを教える代わりに元の姿胎児に戻す事と母胎の
用意を依頼されてね。受けてあげたよ？

襲撃かけてきた中で彼が気に入ったエアブレインの女の子を4体ほどあげた。今は
もう彼女達と外じゃないかなあ？」

『とんでもないことしてないかしら!?!この世界の処女の人達が危険なんだけど!?!』

「いや、多分もう死んでるし意味無いでしょ」

え？とお姉さまが呆けた声を上げる。私だつてアレを傍に置いておくのは嫌だよ。寝首を掻かれるのはかもしれないし、アレの姿には生理的嫌悪が強いから。

「あ、これもお姉さまには言つてなかつたつけ。この世界にはジアド粒子っていうのがあつてね。それに少量でも触れると生命体は「ピグマリオンイズ」っていう病気にかか
るの。」

まあ、自身を更生する物質が変質するだけだから、病気とはいいいがたいんだけどね。これに対する有効な治療法はなし。だから人間は「アンダーグラウンド」っていう安全地帯に逃げ延びたの。

ジアド粒子の中で活動できる生命体はアヴァンドナー及びエアブレインだけってわけ」

『エンブリオは今現在エアブレインの中にそのまま入りこんでる生命体だから……あっ』

「エンブリオは胎の中で死んでんじゃね？まあ哀想だとは思わないけど」

そんな話をしているところに、223号から返信が帰つて来た。それは待ちわびた吉報だった。

「……お姉さま！次の旅行先が移住決まったわ！今度は少し山の中だけど、人類文明がちゃ

んとあるって！」

『マジで言ってる？今度は次元を飛ぶの？貴方どこまで破天荒な事をするのよ……』

上機嫌なのが見てわかるくらいにウキウキしている足取りで自分の部屋に戻っていく。その後ろでお姉さまが呆れた声を上げていたのに私は気付かなかった・

「……よし、準備完了。世界旅行装置改、座標入力よし、出力よし。成功確率試算……9
9・99999%、最低限の要求条件はクリアつと」

モニターとにらめっこしながらキーボードを高速で叩いて最終調整を重ねる。

223号はその後ろで心配そうに私を眺めていた。

「ますたー。すこしやすんだら？もうふつかめだよ」

「あと少しなの、この転移が終わるまでは寝られないわ。万が一がありうるから、完璧に成功を確認できるまで起きてなきゃ」

幾つものデータを彼女の計算したデータと機械の計測による必要なエネルギーの試算などの結果を参照して微調整を繰り返す。

そうして更に数日が経って、私は全てのチェックを終えた。アンデッドじゃなければ死んでたと思う（もう死んでるんだけど）。

「……やつてきました！新世界！」

はい、どうもネクロマンサー「ダフネ」こと私です。現在私は数十年振りの直射日光を浴びています。

青い空に白い雲。決して襲ってくる事がない植物達。私の知る21世紀の平和だった時代の世界その物がここにありました。

青々とした木々に囲まれたせいかわ私はテンションが上がって「最高にハイってヤツだアーツ！」って感じですよ。

心拍数がないので物理的にドキドキしないのが残念ですけど。アヴァンドナーの私だったらちゃんど物理的にも精神的にもドキドキできたのかな？

「よーしーこのまま街まで行っちゃおう！」

私は好奇心を抑えきれず一番近い山の麓の街に向かって直進していった。私の常識が崩される10分前。

「……」

何から突っ込めばよいのか分からず、私は笑顔で硬直していた。街並みは普通だった。街並みは。問題は在住のUMAだ。

頭に手裏剣がぶつ刺さったみたいな頭をしてる人、二足歩行するクソでか怪獣、それを捕まえようとする全身が木の変な人、怪獣を蹴つ飛ばす巨人。そしてそれらを囲む群衆。この世界、これらを皆「ヒト」と判定しているらしい。

私は頭を思わず抱えてしやがむ。

「それももうヒトじゃないよ……別の種族名を名乗って下さい、私のヒト関連の常識が崩れる……いや、割とマジで」

小声でそうつぶやくしかなかった。

【単語と設定】

【永い後日談のネクロニカより出典の単語】

「ネクロマンサー」

ネクロニカのシナリオ進行役の事。

ネクロニカの世界的な意味では「ネクロマンシー」を操る者の事。

この作品では現在「エンブリオ」及び主人公「ダフネ」が登場。

「ネクロマンシー」

死体をアンデッドとして蘇生し操る技術の事。名前は凄く魔術みたいだが、実は科学的。

ある粘菌を表皮全体に張り付けて利用する事で脳機能を代替している。つまりこの世界でアンデッドを確実に殺したいなら跡形もなく消し飛ばすしかない。

「アンデッド」

ネクロマンシーによって蘇った死体達の総称。

「レギオン」「ホラー」「サヴァント」「ドール」の四種類が居る。

・レギオン

本能だけで動く雑魚。個ではなく群で動く。

・ホラー

レギオンよりも知能は高い。でもやっぱり残り二種に比べると劣る。

・サヴァント

ネクロマンサーに絶対の忠誠を誓うアンデッド。ネクロマンシーを扱える個体も存在する為、「ネクロマンサー」を除いたアンデッドの最上位として指揮を執る事が多い。

「223号」が現在登場している。

・ドール

ネクロマンサーの悪意によって作られた人の心を持つ少女達の事。同時に同じ場所で目覚めた者達は「姉妹」と呼ばれる関係を結ぶことが多い。

人類文明崩壊以前に生きていた人間の精神を持つがその記憶は「自分の名前と年齢」と「一度死んでから蘇った事」以外はほんの欠片しか残っていない。

「自身の創造主であるネクロマンサーを倒す事」が使命となっている事が多く、ドールの「ネクロマンサーを倒そうとする事により降りかかる様々な苦難を乗り越える物語」を強制的に紡がされている事が多い。筋書きを考えているのは誰かと聞かれれば、答えは一つだけだろう。

ネクロマンサーを倒した後のドールは大きく分けて二種にわけられる。「ネクロマン

サー」となり前任者の領地を守護するか、世界を歩き回り生存者を捜す序でにネクロマンサーを倒していくかの二択。

「ダフネ」は前者、「モルガナ」は後者だった。

「ポジション」

ネクロニカにおける立ち位置のような物。

下に書かれているもの以外に「ホリック」「ジャンク」「コート」が存在する。

・ソロリテイ

例えるならリーダー。皆の援護をするスキルが多い。

モルガナが言う「リーダー」はこのポジション。

・オートマトン

自身がアンデッド、既に死んだ存在である事を完全に理解しており、それ故に自分の損傷を気にせず仲間と仲間の心を守ろうとする。

「モルガナ」がこのポジション。

・アリス

誰よりも弱い存在であるが、誰よりも人の心を持っている。それ故に仲間の狂気を抑える役割も果たしている皆の妹のような存在。

「ダフネ」がこのポジション。

【黒絢のアヴァンドナーより出典の単語】

「ジアド粒子」

企業の研究所で発見された物質。アヴァンドナーの動力源。

極めて有害で、有効な治療法が存在しない「ピグマリオンイズ」を引き起こす原因。

通常状態のジアド粒子は「ミレシア化ジアド粒子」と呼ばれる。ミレシア化ジアド粒子は粒子の状態で安定して存在し、直接触れたものを緩慢に汚染していく。

ミレシア化ジアド粒子に一定の電圧をかけ続けることで、不安定な「セミア化ジアド粒子」へと状態が移行する。セミア化状態にあるジアド粒子は、質量を持つ物質をエネルギーに変換するという、本来期待されていた性能を発揮する。

しかし最大の誤算は、この反応を循環させることで半永久的なエネルギー産出手段となると考えられていたセミア化反応が、その実一定量以上のジアド粒子を常に供給し続けなければ反応が停止してしまうということだった。ミレシア化ジアド粒子の大量運用は、それだけで環境を大きく汚染する結果を招く。

「ピグマリオンイズ」

陶化現象とも呼ばれるあらゆる生命体の硬質化現象のこと。治療法は一切存在せず、ジアド粒子に少しでも触れた者は、その箇所から始まり徐々に（およそ一ヶ月程度の時

間をもって）身体の硬質化が進む。

その箇所を切断することで発症を止めることも出来るが、ジアド粒子に汚染され尽くした地上で完全にこれを排除することは難しい。

完全に硬質化した人間は、まるで人形のように静かに死ぬ。そうしてあらゆる動植物が砕け散った跡、それこそが灰色の荒野の正体。

「ブレインファーム」

アヴァンドナーを産み出す工場。ただし生産には2〜3年程かかるが、内部では時間を2倍ほど加速している為、実質4〜6年かける。

ブレインファームごとに管理AIが存在していて、新人の教育は管理AIが行っている。

「ニームハイン」と「モルガナ」が現時点で登場した管理AI。

「アヴァンドナー」

ブレインファームから生み出されるジアド粒子を動力源として生み出される人工生命。

エアブレインからアヴァンドナーになった例も少数ながら存在する為、正確には「企業の依頼を受けて動くジアド粒子を動力源とする人工生命体の傭兵」と言った方が良くかもしれない。

「Air-Brain」

企業の犬。Air-Brain回路という物を利用する事で自我を抑制、企業の言う事を聞くようにしたもの。

Air-Brain回路を破壊すると企業の支配から脱却できる。その場合アヴァンドナーとして活動する者が多いが、そもそもAir-Brain回路を破壊する前にエアブレインがぶつ壊れる為その例は少ない。

「Airget-Lamh」

アヴァンドナーの原型。ぶっちゃけ今は地上では見られない。イメージ的にはAC4系列のネクストみたいな奴だと思われる。

「エグゾーストフォートレス」

ジアド粒子で稼働する移動要塞もしくは採掘機械。本作では登場する予定は現在はない。TRPG的にはアヴァンドナーが2〜4機いれば倒せる。

【登場人物及びオリジナルのもの】

名前：ダフネ

性別：女

享年：12

備考：アンデッドでありネクロマンサー。自我を複製してバックアップを複数用意し

ている。

設定：

エンブリオに造られたドールの一人にしてネクロマンサー。

元は気弱で怖がりで泣き虫だったが、姉妹の皆が行方不明になった一人ぼっちになった結果何から何まで一人で頑張る事になり、必要なら非道な手段を躊躇しなくなった。でもネガティブ思考。

一人称は「私」だが、初対面だったり威厳を示したい時は「僕」を使う。けど残念ながら大体ポンコツを發揮してすぐに仮面が剥がれる為「僕」は一瞬しか出てこない。

生前は自我次元論を提唱した学者の娘で、運動はへっぴりこだが座学は大学レベルの知識を持っていた。ちなみに生前の記憶はネクロマンサーになってしばらくしてから完全に取り戻した。

「今何歳？」と聞かれると怒る。

好きな物はラズベリーのタルトとチーズケーキとラザニア。嫌いな物はプリン（生前に一日くらい賞味期限が切れてても大丈夫と思って食べたら見事に当たったのがトラウマ）。

名前：モルガナ

性別：女

享年：16

備考：管理AIの為外に出る事はあまりない。

設定：

ダフネの「姉妹」で最年長だったが、リーダーを年下に任せて自分は身体を張って向こう見ずな行動をとりまくっていた。

生前はいいところのお嬢様だったようだが、自分の事を話したがらない為本名は誰もわからない。

人を揶揄ったり弄ったりするのが好きで、冗談をたまに言う。一人称は「私」。
好きな物はマーマイトとバロツトとキビヤック、嫌いな物はモロヘイヤ。

名前：223号

性別：不詳（混ざりすぎてわからん）

年齢：0（一から精神を作ったからな）

備考：無垢。

設定：

世界旅行の実験台。頭が二つある。

施設丸ごとで転移したため、彼女もまた一緒に転移してきた。「ますたー」ことダフネに忠実。

子供なのでまだ喋るのが得意じゃない。

好きなものはますたーの作るご飯、嫌いな物はカ○リーメイト。

【情報収集と散歩】

「…はあ、やつと荒廃してない世界に来たと思つたら訳が分からない世界に来ちゃつた。ゲテモノのいない普通な世界が良かったんだけどなあ。」

落ち込んだ状態から抜け出す事は出来たが、それでもぼやいてしまう。

そもそも存在がゲテモノな私達が真つ当な世界に行けると思うなというツツコミは言わないで。

「しようがない、起こつた事は起こつた事！過去は取り戻せないし、切り替えて情報収集しよう！」

自分の頬を軽く叩いて気合を入れる。

ネクロマンサーである以上過去に囚われ過ぎても退屈するだけだもの。この世界を樂しむ為に最大限の努力をしよう。

お姉さまに連絡してネットワークの方向から調べてもらいつつ、私は足で周辺を見て回つて街行く人にインタビューしてこの世界についての情報を集めよう。

情報収集を始めてから1か月。外はまあまあ暑くなってきたし、最近まで雨が良く振っていたから七月の中頃くらいだろうか？

まあまあ情報が集まって来たので整理しながらまとめていこう。

・この世界の人類は人口の8割以上が「個性」と呼ばれる超常の力を有している。

「個性」とは私のESPのような物から体そのものに全く別の機能が付加されるものまで千差万別。

・その為、見た目が明らかにヒトじゃない人までいる。でも分類上は人間らしい。

・個性を使って犯罪をする者は「敵」^{ヴィラン}と呼ばれ、それに対処する為の権限を持つ「プロヒーロー」という職業が存在する。

・この世界では私はまだ何もやっていないけど、やってきた所業的に私はヴィランだと思われる。ていうかこの施設自体^{エンブリオ}あいつからそのままもらった奴だから、ここを上手く隠蔽しないと100%アウト。

・現在のNO.1ヒーローは「オールマイト」。超強い。拳一発で天候変えるとか歩く気象兵器じゃん。人間やめてない？

・お姉さまがダークウェブに潜ってたらしいけど、それによるとオールマイトは6年前にオールフオーワンという巨悪と戦って内臓が幾つか壊滅的な打撃を受けて弱体化したらしい。恐らく世間にはオフレコ。

・オールフォーワンの消息は現在不明。しかも世間にその名前の存在は知られてない。

「…まとめると大体こんな感じかな、お姉さま？ほかに何か有力な情報はなかった？」
『ダークウェブでも浅い層じゃこの程度が限界ね。もつと深いところに潜らないとこれ以上の情報は見つからないわ。』

ちなみにネットワークはアヴァンドナーの「オールドネットワーク接続」で問題なく接続できたわ。この世界のネットワークは旧式なものみたいね。』

あの世界と比べるのは流石に無理があると思う。うちの世界も相当に技術が発展してただけ、宇宙には飛び出せなかった。

ジアド粒子とかいうのが一番の違いなんだろうな。ちなみにお試しでジアド粒子による通信を世界中にばら撒いてみたところ、受信したような反応はなかったらしい。

さらつとんでもない事してるね。

『私はこの後でもう少し深層に行ってみるわ。まだ外で行動する為の義体もほとんど出てないしね。』

「率直に言ってお姉さまは多才過ぎると思います。なんで既製品レディメイドを使わないで特製品ワンオフ作り始めるんですか？

外を出歩く為に設計から始めないでください。」

『だって他人の身体ならまだしも、自分の身体よ？半端な物を使う気になれないわ。既製品もなんか肌に合わないし。』

私が言うのもあれだけど、お姉さまも大概ネジが外れてる。

一緒に旅をしてた時から突然体から変な物を生やしたり機械の腕とかライトセーバーを急に持ち出したりと突拍子の無い事をしまくってたし目覚めた時点で既に知識は豊富だったけど、管理AIになってからはそれに更に磨きがかかった。

だからと言ってパーツその物を作るのは聞いてないよ。

「まあ、好きにしていって言ったのは私だから特に咎めはしないけど、ちゃんと環境に配慮してね。」

『わかってるわ』と、本当にわかっているか怪しい感じで答えるお姉さまに背を向けて223号の部屋に向かう。流石に一度も外に出さないのは可哀想だけど、あんな姿じゃ……

…あれ、あんなゲテモノ種族がヒトとして認められてるって事はもしかして223号もこの世界なら普通に出歩けるんじゃないか？

「223号。外に出てみない？」

気軽な一言にその場で飛び跳ねて私に抱き着いてくるくらい喜んだ彼女は貫頭衣に身を包んでいた。二つの頭はあえて出したままで、足元も微妙に見える。

異形である事を隠しもしない服装で私は223号を連れ出す。

当然町の皆の中にも223号を見て二度見をする人は何人かいたが、奇異な目で見る人はいなかった。

うちの異形の子たちはこの世界なら平和に過ごせそうだなあ、とぼんやり思いながら町を散歩した。

行く当てもないので223号に何処か行ってみたい場所はないか聞いてみた。

「ますたー！わたし、うみにいってみたい！きれいなうみ！」

「海かあ、懐かしいね。行ってみようか。少し歩いた先には一応砂浜もあるみたいだし。」

生前の思い出を回想しつつ223号の二つの頭を撫で、海へと足を向ける。時間はお昼を過ぎているし朝から何も食べてないが、アンデッドの私達に食事は必要ないので気にせず歩いて行く。

食事にかかる費用が0なのはいいよね。アヴァンドナーも食事はジアド粒子で済む上、そのジアド粒子は自前で生産してるし。

そうして砂浜に着いたのはいいものの。

「…」

ゴミだらけやん。不法投棄にもほどがあるわ。流石にこの山は色々ダメでしょ。どうしようかな…223号はどう思うんだろ。

「ますたー、おたからのやまだよ!!みにいってもいい?」

そうだった。外の常識を殆ど持っていないし不法投棄の概念を教えてなかったから好意的に受け取ってる。そして意外とあの足走破性能高いな。

言うが早いか飛び出していった223号の後ろをついて行く。彼女にはもう少し慎みを覚えさせた方が良さそうか。

「わあ…:ますたー!みて、うみだよ!きれーだなあ…:」

ゴミ山の上で立っている223号の隣に立ってみれば、彼女の感嘆もわかる。

私の知っている青くて綺麗な海。油で汚染された気味の悪い色をしていない、記憶の中にある輝きと全く同じ物だった。

「そうだね。とても綺麗。私達のいたあそこも、どうにかして除染できたら良かったのに。」

少しだけ感傷的になってしまうのは、潮風が死体に沁みて痛みを感じさせてしまうからだろうか。

「223号、先に帰ってもらってもいい？」

「私、もう少しここにいますよ。」

「…わかった、ますたー。わたし、ちゃんとみちをおぼえてるからだいじょうぶだよ。」

「ますたーも、おそくならないでね。」

手を振って223号は離れていく。

私はゴミ山の上に腰を下ろして座る。

海の風と匂いに触れていると、懐かしい顔ばかり思い出す。ずっと昔、家族旅行に

行った思い出。

もう戻ってこない思い出だ。

「…あの、どうかしたんですか？」

後ろから少年の声が聞こえた。振り返ればゴミ山の下に黒っぽい緑色の癖つ毛の少

年がいて、こちらを見上げていた。

【緑谷という少年】

「いや、僕は特にどうもしてないよ。ちよつと昔を思い出していただけさ。

君はなんでここに来たんだい？僕みたいに散歩がてら海を眺めに来たわけじゃないだろう？」

けろりと私は人好きのいい仮面を被つて笑う。

少年はなぜここに来たのだろうか。このゴミ山じゃ遊ぶにも遊びづらいだろう。かといつて服装から散歩という感じでもなさそうだ。

「あ、入試までに特訓を兼ねてここ一帯を掃除しろつて言われて。結構な頻度で来てるんだけど、中々片付かなくて。」

「ここを全部？いや、冷蔵庫とか何キログラムあると思つてるの、果たして人間がやる事なのそれは。」

真面目に謎だ。流石にこのゴミ山を一人で掃除しろつてどんな鬼がこのメニューを組んだんだ。

「オールマイトがせっかく組んでくれたプランだから、やるしかないよ。それに色々な形をしているから全身に万遍なく筋肉もつくし。これ以外にも色々筋トレもしてるん

だ。」

オールマイトかあ。No. 1に目をかけてもらえてるってこの子意外と凄い子なのかな？

でも私が見たところそこまで強く見えない。だけど鍛え始めたばかりなのかもしれないし、個性とかいうチートもありな世界だと見た目が判断基準にならないんだよね。

「…入試っていつ？期間によってはかなりの苦行じゃない？」

「まだ半年くらいあるから、きつちり鍛えて行けば間に合うよ。」

頑張り屋だな、と思う。自分に与えられた事をきつちり熟そうとする努力を怠らない。

この子の第一印象は「それなりに良い^{高評価}ヒト」だ。ルックスはネクロマンサー的にも一般的にも面白くない^{地味目}けれど、性格面はコートカソロリテイが似合いそうだ。

「さて、僕もそろそろ帰らなければいけない時間だ。僕はダフネ、君の名前を聞いても良い？」

「あ、僕は緑谷^{みどりや} 出久^{いずく}。よろしく」

「へえ、じゃあもしも次会ったらよろしくね、緑谷君。」

ゴミ山の上に立ち上がろうと思ったら思ったより長く座っていたのか力が上手く入ら

なくて足が滑ってしまった。

不意の出来事だったので、アンデッドだからこの程度で死なないと思ってもヒヤツとしてしまう。序でに言うとう足を滑らせたせいでゴミ山が少し崩れてしまった。

しかも運悪くこのままだと私が潰れる感じで。

(…つとと、なんとかESPが間に合った。少なくとも物体は問題なく止められたね。だけど、流石に時間をかけ過ぎた。ESPを利用した姿勢制御も間に合わないな。まあ頭を強くぶつけるだけで済むだろう。)

そう思っ受身だけで済ませようとしたら。

「…間に、合ったっ!」

緑谷が私に向かって突っ込んできて、ギリギリで私を抱きかかえて衝撃から守ってくれた。

御姫様抱っこ(掬い上げる感じだったせいでどちらかというに掲げられたビーチフラッグみたいな感じだが)なので少しだけ恥ずかしくなった。

「あ、ありがとう。長く座りすぎてしまっていたみたいだ。

思いつきり頭から突っ込んで来たが、体は大丈夫かい?少し見せてくれ。」

言うが早いかESPでゴミを元の場所に戻しながら緑谷の身体を調べる。

大きな怪我はしていないし、特に目立つ傷もないようなので簡単な処置だけで終わら

せる。

「これでよし。特に大変な物もないし、これ以上の怪我に気を付ければ問題なく今日のトレーニングも大丈夫だろう。」

「あ、ありがとう。ダフネちゃん、応急処置に慣れてるんだね。」

「そういう仕事をしていた人が親だからね。絆創膏は持つて来ていたが、まさか連れて来ていた友達じゃなくて他人に使う事になるとは思わなかった。

僕の不手際だ。申し訳ない。」

謝りながら処置で出たごみを自分の荷物に入れる。

緑谷はそんな事はないと私を慰めてくれたが、こればかりは私の感性の問題だ。

「さて、今度こそさよならだ、緑谷君。また次会う事が会ったらのんびり話でもしようか?」

そういつて手を振って砂浜を後にする。

入れ違いでガリガリで金髪の骸骨みたいな顔をした男が入っていった事に私は気付かなかった。

「お姉さま、帰ったよ。223号は？」

『あら、おかえりなさい。223号は今はお風呂よ。初めて海を見たつてはしゃいでたわあ。子供つてやつぱりかわいいわね。』

帰宅途中に連絡を受けた私は、施設内に入ったら手洗いをしてすぐにモルガナお姉さまの下に直行した。

世間話もほどほどにして本題に入る。

「で、どうしたの？重大な事実を発見したつて聞いたけど。」

『それがねえ、ちよつと色々不法な事してみたら「オールフォーワン」の生存可能性が高くなつてきたのよねえ。』

∴お姉さまは一体何をしたんだろうか。何をどうしたら消息不明で用意周到な巨悪の手がかりが見つかるんだろう。

少なくとも「ちよつと」で済むような事じゃないのはわかつてるが。

『簡単よお。ちよつと世界中のコンピュータをハッキングして盗聴しただけよ。インターネット関連は私達の方がウン百年先を行つてるからねえ。簡単に入り込めたわ。』

「やつぱりちよつとなんてレベルじゃないじゃん!？」

全力でツツコミを入れる。やる事のスケールをでかくしないと死ぬ病気にでも罹つていいるのだろうか。はつきり言つて御せる気がしない。

そして、その後更に爆弾を落とされた。

『あ、後もしかしたら場所を逆探知されてるかもしれないから備えておきなさいよ。』
「なんで!?!今から防衛策を練らなきゃいけないの!?!」

お姉さま曰くアヴァンドナーの「オールドネットワーク」に逆探知を阻害する機能はあるものの、ある程度腕のある奴ならそれを突破して逆探知できるらしい。

恐らくオールフオーワンなら時間はかかるが逆探知が出来るかと踏んだのだろう。

「ああもう、お姉さまは自由奔放なんだから!お姉さまの身体は出来たんだよね?」

最優先で私のスペア製作!パーツは重量二脚よりの中量機でハンガー持ちで作って
!」

大急ぎで防衛策を練る。最低限この施設の表部分、壊れても支障のない部分を戦闘用の区域にする。

そうして全力で防衛策を練って作成してちょうど一週間後、一夜にして一つの山が一日で荒れ山と化す事となった。

「ネクロマンサーもアリスも普通は前線で戦わないんですよ?」

「…やあ、遅かったじゃないか? 君がオールフォーワンであっているのかな?」

「僕がその質問に答える必要があると思うかい? それに、名前を聞くのなら自分から名乗るのが筋だと僕は思うけどね。」

盗聴から一週間でオールフォーワンが強襲を仕掛けてきた。

未来技術を相手に一週間で盗聴箇所を割り出せた事を褒めるべきか、逆探知にわざわざ一週間もかけた事を貶すべきか微妙なラインだ。

私は大量の武器を仕舞いこんだ鞆を背中に背負い、合金製のトランクを片手に立つ。

「それもそうだね。僕の名前はダフネ。どこにでもいるしがないネクロマンサーさ。」

「君みたいなネクロマンサーがそこら中に居る世界は世紀末だと僕は思うけどね。」

さて、君が名乗ったのなら僕も自己紹介をしよう。僕がオールフォーワンその人さ。説明は今更必要ないだろう?」

説明を端折るのはあまり自己紹介として良くないと私は思うけど、ダークウェブを深層まで潜ればオールフォーワン関連の逸話はザクザク出て来る。

「だけど、流石に私に失礼だと思うので拳銃を引き抜き抜きざまに一発お見舞いする。え？私も同じじゃないかって？何を言っているのかわからないな。」
私の世界では結構いたからセーフ

「はは、これまた物騒な挨拶だね。君、案外暴力的な人間なのかい？」

「失礼は君の方が先だ。きつちり自分の事くらい自分の口で説明しろ。それにこの程度の一発、君にとっては見戯に等しいだろう？」

拳銃から硝煙が僅かに上る。見た目の年齢12歳程度の娘が撃つには異様な大きさの大型拳銃を片手で向けるって相当な絵面だね。

アンデッドになるにあたってこの程度の銃を片手で撃てるくらいの筋力強化は受けている。しかも私はネクロマンサーになった後さらに色々やっている。

「…おおい、その銃はその年齢の女の子が片手で撃てるものじゃないだろ。君、見た目にあわず相当筋力があるみたいだね。」

「だからどうしたんだい？先に言っておくと、僕は君を本気で殺しに行こうかと思っている。勧誘も排除も断らせてもらおうよ。僕は君と違って大それた願望も野望も持っていない。」

ただ自分が楽しければいいのさ、それが破滅的願望だろうとも。それがネクロマンサーたる者の矜持だ。君は情報を見る限り、何一つ面白くない。だから僕にとっては邪悪な物に他ならない。

僕を味方に付けたければ、少しは面白そうな物を見せてくれたまえ。」

「おやおや、随分嫌われてしまったみたいだ。全く、暴力はあまり好みじゃないんだけどな……!!?」

最後まで聞かずにESPで合金トランクを高速で動かして入り口から外まで弾き飛ばし、それを追って外に飛び出す。

そのままESPを利用して周囲の木を引っっこ抜いてオールフオーワンにぶつける。

「不意打ちとはいえ、こつとも決まると首を傾げてしまふね。オールマイトの臓器に致命的打撃を与えられたんだろ?もつとやる気を出してくれよ?」

根がむき出しになった樹木の山の近くにふわりと着地する。

まだ戦闘力を計れていないが、伝聞通りならこの程度じゃ傷はつけられない。この程度の打撃ではせいぜい挨拶のようなものだろう。

「全くド派手な事をするね。いきなりこんな攻撃を出されてびっくりしたじゃないか。」
塊を内側から吹き飛ばしてオールフオーワンが現れる。

ただの拳圧であの樹木の塊を吹き飛ばせるとか本当にイカれてると思う。

「ド派手好きなのは姉譲りさ。僕は君を殺す気でやるから、初っ端は派手にしないと見栄えが悪いだろう?」

まあ、これで仕留められるのが一番良かったんだけどね。何しろこれが一番環境に優

しいから。」

出てきたオールフォーワンに向けてアンデッドガンをぶっ放し、続けてランチャーも撃ち込む。

弾薬切れまでアンデッドガンを撃つたら投げ捨てて間髪入れず対戦車ライフルに持ち替えてマガジン全発を撃ち切る。もう片方の手のロケットランチャーは装填が面倒なのでマシンガンに変えて撃ち続ける。

だけど、相手は普通だったら死んでもおかしくない弾幕を回避して接近してきた。いや、その動きおかしいだろ、なんであの弾幕抜けられるんですかね。

思いつき殴って来た相手を合金トランクを囮にして回避する。

「本当に化物だな！あれを抜けるとは思ってなかった！」

「僕は帝王と呼ばれる男だぜ？この程度避けられなければ裏社会を統べる事は不可能だよ。」

日本刀を鞘から抜いて伸びきった腕を狙うが、斬るよりも先に引つ込められ、そして横っ腹から衝撃で吹き飛ばされる。

どんなに高望みしても体重の軽さはどうにもできない。枯葉みたいに転がされる。ESPで鞆は近くに引き寄せるのが間に合ったが、日本刀は手放してしまった。

「腹に穴を開けるつもりで殴ったんだけどなあ。君、防御面も優れてるんだね。」

「…いたた、この服は気に入っていたんだけどな。全く、幼気いたいけな女の子の服を剥くなんて恥ずかしくないのかい？」

殴られた部分の服が破れ、鱗の生えた腹部が露わになった。

自分の身体をド派手に弄らなければまず勝てないと踏んだが、ウロコを使つてもここまでダメージが入るのは想定してなかった。

「はあ、面倒だからもう出し惜しみは少なくしていこうか。流石にこれじゃジリ貧で負ける。」

背中の服を突き破り「やぶれひまく」を外気に曝す。服の内側に隠していた状態では身体の背面に集中していたがそれを開放する事で全面カバーに変更する。

それだけで終わらず皮膚に絡みつく形で「ほとけかずら」を展開、その結果上半身は胸元と幅広な袖以外のほとんどが破れてしまった。サービスだよ喜べ（ただし異形）。

鞆から取り出した「空飛ぶギロチン」を片手で構えて歪に笑つて見せる。

「第二ラウンドつて奴だよ、オールフォーワン。少しやる気出していくからね。」

「…異形種を見た事はたくさんあるけど君みたいなタイプの個性を見るのは初めてだ。さしずめキメラとでもいったところかな？」

その質問には答えずにギロチンを振るつて飛ばす。不可思議な軌道を描くソレを回避しながらオールフォーワンは私に接近してきた。

伸びきったギロチンを引いて背後から攻撃しつつ振るわれた拳を皮膚で防御する。

私の背後からの攻撃を回避した事で私が後ろに下がるだけの時間が稼げたので飛び退り、ざっと5 m程離れた場所に向かい合う。

(一発受けただけで皮膚がそれなりにダメージを受けた。余り回数は受けられないな。)

一瞬互いに動きを止めた後、均衡を崩すように私は距離を詰めてギロチンをぶつけ、同時に意図的に皮膚で視野を奪いながらESPで鞆を動かし死角に少しずつ爆発物を落としていく。

数分間そのまま打ち合い、ついに皮膚が壊れた。粉々にされた皮膚に絡みついていたほとけかずらから花粉がばら撒かれて私の姿を隠す。

「目くらましのつもりかい?」

幾つの個性を使ったのか分からないが、隠された私の姿を露わにした。

その手には手榴弾と火のついたダイナマイト。そして、この辺り一帯にも爆発物を仕掛けてある。

「何を…」

「はい、ドーン!」

オールフオーワンが言葉言い切る前に両方ともぶん投げて起爆する。

そして周囲に撒いた爆発物の誘爆も招き、ほぼ爆心地にいた私も含めて大爆発を起こ

す。ちなみに、この戦闘区域は人里から少し離れているから、聞こえても花火くらいの音に減衰されている。

私の施設は人道的にヤバイ物が詰まってるから、人里が近場にならない山奥にひっそりと転移させたのだ。

土煙が大量に舞う中、服を含めて無傷で佇む私は辺りを見回して人影を捜す。

「流石にこの程度の攻撃で死ぬほどオールフォーワンは弱くないと思うけど、どこに隠れたのやら。」

速めに決めようとド派手に土煙をあげてしまったのは僕の失敗だね。」

少しだけ自分の浅慮な行動を反省したが、やってしまった事はしょうがないので見えないか土煙の向こう側を凝視する。

少しして、後方の遠くから踏み込む音がした。

反応して振り返るが、

「少し気付くのが遅かったね。」

いつの間に近付いたのか：いや、筋力を増強して一瞬で踏み込んだのか。複数の個性を同時に使用できるなんてバカげた個性だよ。

「あ」

防御を挟む隙も無く、オールフォーワンの拳が私の腹部を比喻無しで貫いた。

【やったのバレたら無期懲役ものだよ、これ】

「今度はちゃんと通ったね。君の防御はあの皮膜に頼っていたのかな？」

腕を身体から引き抜かれる。潰れた臓器がその行動で更に摺り潰された。

べちやりという擬音が最も適切であろう形で地面に頷れる。

思ったよりずつと痛い。「おおあな」の開いていた女の子はいつもこんな感覚だったんだなあ、と他人事のように自分の傷を思う。

「返事がないね。もしかして死んじゃったかな。」

一応まだ生きている。生きているが、この痛みを抱えたまま戦うのは正直に言つて辛い。だから体に仕込まれたパーツが活動を始めるのを待つていた。

数秒後、本命のパーツが動き始め、脳が一気に活動を始める。ドーパミン、β-エンドルフィンなどの脳内麻薬を自身がダメージを受ける事をトリガーとして過剰分泌する改造の効果で痛みをごまかす。

「……くふふつ、コートちゃんとお揃いだア。嬉しいなあ。お揃いつて仲がいい子みたいでいいよね。」

「うわあ、その傷でなんで平然と出来るのかな。とつくに失血量が致死量を超えてると

思うんだけど。君、滅茶苦茶タフだね。」

問題は頭の気分がハイになっちゃって色々おかしくなっちゃう事だけど。

ちなみにこうして冷静に物を見ていられるのはどんなに怒ってもどこか頭の一部は冷えてるみたいなのあるじゃん、そういう感じ。でも指示系統が最高にハイってヤツなせいで冷静に動かない。

今の私は会話こそできるものの、体はほとんど本能で動いている。元々「アリス」だったんだけどなあ、私。バリバリ「ホリック」じゃん。

「それは人間の話だろ？ ははは、僕にその法則は当てはまらないよ。」

「君は、人間じゃなくてキメラだからって事かい？ それでも血液は生命活動には必須な物だ、キメラだからと言ってその法則から外れるはずがない。

…まさか、君は生きた死体リビングデッドって事か！」

「せいーかい。くふふつ、思ったより気付くのが遅かったね。まさか、死体が動く事がないと思っただのかい？」

こんな常識を鼻で笑うような世界でもその常識が通用すると思っただのかい？ ま、僕は極めて特殊な例だけだね。

序でに言っておくと、今の僕は対ホラー、サヴァント戦闘に特化したアンデッドだよ。でも対人間はあまり想定しなかったから、正直付け焼刃だ。

君相手にここまで善戦できてるだけマシという物だと思いがね。」

ふらふらと立ち上がりながら身体から僅かに零れた腸を乱暴に引きずり出して口に入れる。中々グロい絵面だけど、肉を食べる事で自身を再生する性質を持つてるんだからしょうがないよね。

ネクロマンサーになってから知ったけど、私のメインクラスがステーションじゃなくてゴシックなのはちよつと不満だった。エンブリオは何を求めてアリスにこんな性質を付けたんだろうか、つて思った。

「あは、オールマイトと互角に戦った君からはどんな味がするのか僕は気になるなあ。一口ちようだよ。」

「それで僕が『はいどうぞ』つて渡すと思うかい？でも、君はとても面白い個性を持っている。」

言う前に吹き飛ばされてしまったし何なら言う前に思いつき拒否されたけど、僕の口からちやんとおうか。やっぱ僕は君を仲間に勧誘したい。

君の言葉を借りるなら面白い物、もしくは未来像を見せれば僕について来てくれるのかな？」

まあそうだろうね。誰だつて食べられたくはない。

…さて、そう来たか。断片的情報ではあまり面白くなさそうだったけど、具体的に何

をするのが気になるっちゃ気になる。

「聞くけどお、僕は今すぐに君の身体を食べたいんだ。だから、戦戦いながら聞くとしようか。」

「十分だよ。正直少し乱暴だと思うところはあるけど、君に話を聞いてもらえるのならそうしながらでも話そうか。」

よぶんなうでを袖から垂らして四本腕にする。機械化された腕が特徴的なものだ。申し訳程度に元から出してた両手でボールを持つ。

「身体を滅茶苦茶弄ってるね。もしかして僕対策？」

「そうじゃないよ。ちょっと昔に色々あって、その関係で色々増やす必要があったんだ。正直弄りすぎたかなとは思ってるけど。」

事実エンブリオの領地を引き継いだ直後は場所を奪いに来た奴らを蹴散らす必要があった。その関係で使えるものから切って貼つてをずっと続けたのが今の身体だ。

実のところ見た目をそのままにしながら体を弄るのが一番大変だった。服を改良して色々増えても見た目を損なわない様にするとか細部を変えたり試行錯誤を繰り返した。

変なところに執着するとか言うな、私だってある程度生前の見た目は残したいんだよ。

「じゃあ、まず僕の目的から話そうか……」

そうして、私達は宵闇の中、オールフォーワンの語りの開始と同時に戦闘を再開した。

報告書

XXXXX年7月28日発生「^X山^X山事件」について

概要：

静岡県某市の山奥にある「^X山^X山」が一夜にして荒れ山になった事件。

幾つかの爆発の痕跡、様々な傷のついた樹の幹などから何者かが戦闘していたという結論が出た。ただしその正体は人数不明で、僅かに残った足跡から最小で2名が戦闘していたと思われる。

追記：一人だけの戦闘で起きるような傷跡ではないが、あくまで最小の人数であり、断定したわけではない。

No. 1ヒーロー「オールマイト」を含めた数十人で山を探索した際、辛うじて樹木が残っていた地点から建造物を発見し、内部から三名の生存者を救出した。

建造物の詳細及び救出者については別紙に記載する。

戦闘痕について：

先ほど記述した建造物周辺を除いてほぼ山全体に存在している。

樹木には「一般的な銃器」「強力な何らかの砲弾」「極めて鋭利な刃物」「通常の刃物」のような痕跡があり、地面にはクレーターが数十個存在。

内一つはTN T l k g相当の爆発が発生しており、大量の爆発物が使われた事が推測される。また、現場に落ちていた焼け焦げた鞆から溶けた日本刀と銃器が発見された。

現状では建造物或いは生存者を狙った組織同士の大規模な抗争ではないかと推測されているが、当時大きな動きをしていた組織は存在せず、未だに謎は解けていない。

また、血痕のような物も残っていたが残らず蒸発しきってしまったていて、シミが残っているだけでDNAによる判定も出来なかった。

建造物について：

内部を統括している人間の助手であった「223号」（詳細は後述）により内部の構造が説明された。

彼女の説明によると、この施設の名前は「ファタ・モルガーナ・ラネズ」であり、以前の主は「エンブリオ」という老人だった。

ここは死体を生き返らせる技術「ネクロマンシー」及び残りの二名の持つ個性「アヴァ
 ンドナー」の人為的な作成が行われていた実験場であり、223号もその実験の失敗作
 の一人らしい。

説明を裏付けるように建造物内部には人間を含めた様々な生物の死体が存在し、ヒト
 の身体を滅茶苦茶につなぎ合わされた冒瀆的な死体や、背骨に少女の頭部が付いた生物
 (223号曰く主のペット)も存在した。

建造物そのものは、外壁及び内壁の材質と通路の形状からから推測するに核兵器の直
 撃に備えて作られたシェルターのようなものだと言測されるが、この地点にそのような
 物が建築された届け出はなく、誰がいつどういう意図で立てたのかは不明である。

救出者：

「2223号」

性別：女

年齢：不明(測定不能、作成年的には4歳くらいらしい)

個性：不明(異形型であると推測)

足は触手、片腕は人間大のカマキリの鎌、もう片腕は肥大した腕で、少女の頭部が二
 つくっついている。

備考：

身体の大きさに反して知能が幼い為、恐らく若くして死んだものと思われる。
生前の本名不明。

「モルガナ・ル・フェイ」

性別：女

年齢：16

個性：「アヴァンドナー（本人呼称）」

滅多に本領を発揮できない為、本気を出した際の出力は不明との事。

主動力が人類には有毒な物質である「ジアド粒子」の為、普段は生命活動以外に使用されることはない。また、その場合ジアド粒子は外に漏れる事はない。

ただし、その状態でも普通に走るだけで時速100kmは出せる。

備考：外部の情報を探る為に違法行為を何回かしていた事を自白。状況を鑑み嚴重注意で不問とした。

「ダフネ・ル・フェイ」

性別：女

年齢：12

個性：「イルドナーク」

名前が違うだけでアヴァンドナーと同じ。

モルガナによると本来は二つが示す物は違うらしいが、同じ個性名だとかっこよくないからという理由でこの名前にしたらしい。

備考：名前からわかる通り、モルガナ・ル・フェイの妹。ここに来る以前の記憶がない。

【雄英高校の入試！】

『あー、おはようダフネ。

偉い人達との話し合いの結果、私達が出てきた建造物をこれからも私達の住居にしていいって言われたけど、君をヒーローにさせたいって言ったら倍率300倍の雄英高校ってところを受験して入ってもらおう事になったから。

なに、安心してくれ。私が勉強を見てあげるからね！』

妙なまでに小綺麗なベッドで目覚めた後、私は突然モルガナお姉さまにこんな事を言われて地獄のように勉強させられました。わざわざブレインファームの空間を利用して残り半年弱の時間を1年近くに引き延ばさないと欲しかったです。そんなことを試験中に考えています、初めましての方は初めまして、生前の私を知っている方はこんにちは、ダフネ・ル・フェイです。

ところで目覚めて半年弱の私（小学生の勉強までしかしてない）にいきなり高校受験っておかしくないですか？享年12歳ですよ？

ですけど、私の肉体年齢は来年度で16歳らしいです。一度死んだと思ったら15歳に成長してました。

後、知らない内に体が超高度な技術で作られた機械になってました。普通の生体パーツもあるので日常生活は問題ないですけど、明らかに命を刈り取る形をしているのもあるので何のためにこんなパーツが出来たのか不思議でなりません。どういう原理が働いてこんな体になったんでしょうか。不思議ですね。

と、そんな事を考えながら答案を埋めきって筆記試験を終えました。これから実技試験の説明に行くのですが、人が多くてさつきから人酔いしちやいそうです。更に実技試験用の手足を入れたクソデカキャリーバッグのせいでかなり移動が不便で困ります。

「あ、ダフネちゃん……?」

「あひゃい!ダ、ダフネですけど……!」

フラフラと不安げな足取りで歩いていたらいきなり後ろから声をかけられて変な声をあげてしまいました。

はて、ここに知り合いましたっけ?

「やつぱり……!後ろ姿が似てたから声をかけてみたんだけど、あつててよかった!一回しか会わなかったんだけど、凄く大きくなったね」

どうやら記憶の空白期間に一度会ってたみたいです。だったらちゃんと説明しないとけないですよね。

「……ごめんささい。実は、私ここ数年の記憶が飛んじやつてて……」

ブロッコリーみたいな髪の毛をしている子がぼかんと口を開けている。変な物でも見たのでしょうか？あ、もしかしてご飯粒が私の顔についてたのかな！（ここで記憶喪失という事自体が珍しい事に気付けない私も私ですね）

「ごめん、ダフネちゃんが言い辛い事だったかな……」

「へっ?!いいいや、そんなことは全然ないですよ？むしろ空白の期間を知っている人がいるだけで十分ですから」

「そうなんだ……。僕は緑谷 出久。よろしく、ダフネちゃん」

少しだけ緑谷さんが微妙な顔をしました。なんででしょう。

立ち止まって話した事で多少は気分がマシになったのでまた目的地に向かいます。

まだ少し気持ち悪いので足が覚束ないけれど、気になるほどじゃない。

でも緑谷さんは心配してくれたのかついて来てくれました。……あ、受験生ですから目的地一緒でしたね、自惚れてましたごめんなさい。

無事会場に辿り着いて自分の席に座ると、少し時間をおいてからなんかすごく珍妙な格好した男の人が出てきました。

『今日は俺のライヴへようこそー!!エビバディセイヘー!!』

……なんだこの人。私は困惑しました。ライブじゃなくて実技試験の説明会を受けに来たんですけど。

でもその後は普通に説明していました。所々変な人感があふれる動きはしましたけど。そして受験生をリスナーと呼ばないでください。私は貴方を知らないのです。リスナーになれません。

(それにしても1Pから3Pまでのポイントが与えられたロボットをタイムアタックで潰す試験、ですか。暴力は苦手なんですけど…)

ていうかお姉さま絶対実技試験がどういうパターンなのかわかってこの脚部にしましたよね。武器を持たせなかったのは、まあ使ったらチートですからしやうがないですね)

あと説明終了後の質問タイムで見た目がとても真面目なような眼鏡の人が質問ついでに緑谷君を注意しました。あの人がしたいんでしょうか。人を吊るし上げるような真似は嫌いです。

それを口に出すのは怖いので何もできませんでしたが。巻き込まれたくない一心で傍観してしまつたので後で謝りに行こうと思います。

まあ、彼の質問内容はタメになつたので良いですけど。要約するとOPの妨害ロボットのがいて、そいつは強いので逃げる事をお勧めする、という事らしい。

『さて、最後にリスナー諸君にわが校の「校訓」をプレゼントしよう!かの英雄ナポレオン・ボナパルトは言った!「真の英雄は人生の不幸を乗り越えて行く者」と!』

「更Plus 向Ultra!」!それでは皆、良い受験を!」

そして説明会会場から出てすぐに私は人酔いしながらキャリーバッグを持って実技会場へのバスへと乗り込みました。

受験会場の一つに辿り着いた。正直な所、私はこの中で一番異質な姿をしていると思う。

足元まで隠す貫頭衣に付けられた被つてないフード。ファンタジーなお話によく出て来る外套とフードが合体したアレみたいな奴です。

ちなみにこれを着た後にバスの中でパーツを変えてました。オートセパレートって便利ですね。自分から体を切り離して別パーツをくつつければいいんですから。

私はキャリーバッグをバスに置いて行き、外で集まっている人混みから少し離れたところで縮こまっています。あんな人の塊に行くの怖いです。

雄英高校の志望者多過ぎで『はい、スタート!』……えっ、いきなりですか? いきなりすぎて皆止まっていますよ?

『ほらほら、どうした? 敵は待つてくれないぞ!』

本気で言ってますか、それ。

確かに犯罪者は突然現れますけど、実技試験にすらその要素を入れますか。

そんな事を思っていたら皆より一拍遅れてしまいました。流石にまずいですね。受かってお姉さまに言われてますから、此処で失敗したらお姉さまにお尻を叩かれちゃいます。

あれ痛いから本当にやめて欲しいです。

入り口に殺到する受験生の頭上を壁キックを連発して走り抜けます。非常時じゃない時は生命活動の維持以外に使えないようにプログラムされてますから、ジアド粒子は使ってません。ホントこの身体能力どうなっているんでしょうか。

それでも時速100 kmは出せるので余裕で先頭で会場内へ入り込みました。

そのまま中心まで爆走して、ついでに見かけたロボットは全部蹴り飛ばして破壊しました。マニューバ〔M―B^ベeat^アtr^トic^リe19^{チェ}〕に搭載された「突撃衝角」の蹴り一発で破壊できる事が分かったお陰で最効率で通り過ぎた敵を壊せます。

「でも、この試験方式やっぱ好きじゃないです……暴力は苦手ですし。」

もしこれを振るう相手がロボットじゃなかったらどうなってしまうのか考えたくもないです……」

ポイントを数えてないので正確なポイントはわからないが大体30体程倒して周辺

を走り回っていたのですが、残り時間が1分近くとなった所で轟音とともに大きなロボットの前に出現しました。

あれが説明されてたOPロボットのなのでしょう。あんな大ききさだったら妨害扱いされて当然ですね。受験生は全力で逃げてますね。

私も怖いと言えば怖いですが、記憶の欠片にある恐怖の感情に比べたら大した事じゃないと思う。

そんなことを思っていたらロボットの足元に瓦礫に足を取られたのか倒れている小っちゃい茸みたいな子……長いから茸でいつか。茸がいて、ロボットがそれに狙いを定めて攻撃しようとしていたのが目に入る。

皆逃げるばかりで茸に気付けてない。

まあまあ離れていたの間に合うか心配でしたが全力で疾走した結果、あと一秒判断が遅れてたら間に合わなかったくらいギリギリで救い出す事に成功しました。

序でに腕部を駆け上がったってお返しに全力で蹴りをぶつけてからそのままを安全圏まで連れて行きます。

『終了———!!!』

安全圏に着いたところで試験の終了を告げる声が響きました。

女の子を地面に下ろしてさっさと荷物を取りに行こうと思つたら、茸が話しかけてき

た。

「た、助けられてくれてありがとう。足に瓦礫が当たっちゃって少し動けなかったノコ……」
「ひやつ!? あ、ご、ごめんなさい……急に話しかけられてびっくりしちゃいました。ていうか別にそこまで思わなくてもいいですよ……むしろ普通なら抱えたまま攻撃しにいったりなんてしませんし……」

こうして心の内では問題なく喋れるんですけど、やっぱり他人と話すのは苦手です……いつかもうちよつとコミュニケーションが取れる様になりたいんですけど、生まれ付いた性格を変えるのは中々難しいですね……

「いきなり抱えあげられて巨大ロボの腕を駆け上がったのにはちよつとびっくりしたけど、助けしてくれたのは事実ですよ。ちよつとジェットコースターみたいでおもしろかったです」

「ええ……」

この茸ちゃん、意外と強いですね……精神的な方向で。時速60km（人を抱えていたので速度は抑えておきました）は確かにジェットコースターよりちよつと遅いくらいの速度だけど……

「じゃ、じゃあ良かったです。」

わ、私はダフネ・ル・フェイ。もし受かったら仲良くしていただけると助かります……

私、臆病だし気弱だから人付き合いが苦手で……」

「分かった！私は小森 希乃子ノコ！あ、でも受かってもクラスが同じになるとは限らないからね？」

「ふえっ!?あ、そ、そういうえばそんな事もガイドに書いてありました……」

「意外とアホの子ノコね」

希乃子ちゃんの純粋な言葉がジアドスファイア心臓に刺さりました……泣きそう。

その言葉で凹んでしゃがみ込んでしまった私を希乃子ちゃんが慌てて慰めてくれました。いい人です、お姉さまよりずっと優しいです。

ちなみにその後希乃子ちゃんの足（普通に立てるくらいの軽傷でした）をリカバリーガール？っておばあさんに治してもらって、帰りは希乃子ちゃんと「受かったらまた会おうね」みたいな事を話して別れました。

友達ができてうれしいです。

【入学式…じゃないんですか?】

入学試験から1週間経ちました。

現在進行形でお姉さまに剣術とか体術を教えてもらっているのですが、めちゃくちゃしごかれてます。

特に剣術は当たったら木刀だからとても痛いです。死なない様に手加減はしているらしいですけど、体術では当然の如く発頸とか使ってるし剣術では木刀なのにオートセパレートが自動で発動するとか、お姉さまはどこで何をしたのか不思議なくらいに攻撃の線に容赦がありません。

ちなみに私は何故かバールを持たされています。曰く「釘を抜く方を人にぶつけば間合いが読みづらい上に当たったら一撃必殺級の凶器になるし、曲がっている部分でぶつければ鈍器にもなる便利な武器だから」だそうです。小声で言った「個人的趣味もあるけど」という言葉は聞かなかった事にします。

10回打ち合ったけど10回とも受け流されてぶん投げられたせいでふて腐れ始めた頃に、223号さんが手紙を持ってきました。差出人名は「雄英高校」でした。

「ますたー！おてがみきたよー！」

「あ、ありがとう。雄英高校からって事は結果の通知でしょうか？」

「だろうねえ。私も一緒に見てもいいかしら？ 不合格だったらいつでも出来るように。」
「やめて下さいお願いします。一緒に見るなら普通に見てください。」

叩かないでください、あれをお姉さまの筋力でやられるととても痛いんです。拳骨でぐりぐりもやめてください。以前それでブレインファーム内の仮想空間とはいえ頭蓋骨にひびが入ったんですから。

そしてちよつと残念そうにしないでください、私を玩具か何かだと思つてませんか？
「むう、弄りがいがある妹だから構つてあげてるのにつれないわねえ。全力でお姉ちゃんを遂行する！ つて気概でやってるのよ？」

「遂行した結果で頭蓋骨にひびを入れるのは姉としてどうかと思ひますよ!」
全力でお姉さまにツツコミをしている間に223号さんが「話が進まない」と思つたのか私達をおいて手紙を開けていた。

「…ますたー。へんなのがはいつてるよ？ なんだろうこ『わーたーしーがー投影された!』わあっ!」

223号がびつくりした声で私達は言い合いを止めて本題の方向を向く。

それは投影装置のような物で（この辺りの装置は近未来的ですね、雄英高校の予算が気になります）、そこには一昔前にやつた人気曲トップ10を紹介するあの番組みた

いなセットとスーツを着たオールマイトが映っていました。本当にあの学校の予算はどうなってるんでしょう。というかオールマイトは雄英高校の関係者でしたっけ？

『んん、なぜ私がここに居るのか気になるかな？ 実は私は今年から雄英高校の教師として教鞭を取る事になった!』

あ、そうなんですか。ていうかここでそれ明かすんですね。オフレコにしなくていいんですかその情報。合格者の頭が弱かったらネットにその情報上げちゃうかもしれないよ？

お姉さまもなんだか微妙な表情です。何とも言えない物を見たような顔をしています。が、どうしたんでしょうか。

『さて、そういう話は置いておいて、結果も気になるだろう!』

筆記試験の結果は全教科満点での1位!

そして気になる実技試験の結果は敵Pが45!これだけでも十分なポイントだが、もう一つ我々は見ているポイントがあった!

それは「救助ポイント」!ヒーローの本質、人助けの行動を現役のプロヒーローである雄英高校の教員たちが評価して与えられるポイントだ!

ダフネ少女の獲得した救助Pは30!合計75P、実技2位、総合1位で合格だ!

おめでどうダフネ少女、此処が君のヒーローアカデミアだ!』

「おめでどうダフネー！流石私の妹！今日はごちそうね！栄養にはならないけど。」

合格した事も、お姉さまが喜んでくれた事も嬉しかったけど、お姉さまの最後の一言で色々台無しです。そういう事は口にしないお約束ですよ。

取り敢えずお姉さまがご飯を作っている間に書類の中で自分で書ける部分を書いていたら、その後今日の訓練のクールダウンを忘れそうだったので急いでしました。

ちなみに、その後にお姉さまから「いつ何が起きるか分かったものじゃないから【Beatrice】は常に持ち歩いておいて」と言われました。

そんなこんなで、4月です。私は校門前で知ってる顔が居ないか確認できないかな、と思つて早めに行こうと思つたら早く来過ぎました。

自分の足の速さを失念していたせいで始業1時間前についてしまい、校門前で30分近くぼーつとしていた羽目になりました。

「あつ、ダフネちゃん！やつぱり合格してたノコー！」

「…にやつ!?な、なんだ希乃子ちゃんですか…ぼーつとしてて気づきませんでした…」

突然話しかけられてお決まりのように声をあげる。声ですぐに誰か分かったけど、ぼーつとすすぎてて声をかけられるまで気付かなかったです。

それにしても普通に希乃子ちゃんも来るの早くないかな、と思いました。

「希乃子ちゃん、来るの早いですね。まだ30分前ですよ?」

「それはダフネちゃんも同じでしょ。」

…入学式の15分前くらいまでには大体の人が集まってるノコ。だから早めに来ておくと後から来た人に楽に挨拶ができるから、話の流れが作りやすくなつて友達も少し作りやすくなるよ。ダフネちゃん臆病で人見知りだし、覚えておくと良いノコ。」

「私の評価がちよつと酷いけど全くその通りだから言い返せない…!」

シユンとしながらも希乃子ちゃんの言葉をきつちり覚えておく。そして、連れ立って一緒に校舎の中に入っていく。

「そういえば、ダフネちゃんは何組? 私はB組なの。」

「わ、私はA組だから希乃子ちゃんと別クラスですね…うぐう、友達作らなきゃ…」

希乃子ちゃんからクラスの話題を振られたが、別クラスだったのでちよつと凹む。

その後B組の前に着くまで色々話したけど、希乃子ちゃんは実技試験に受かれるか少し心配だったらしい。希乃子ちゃんの個性「キノコ」で関節部にキノコを生やして破壊してたらしいけど、ビル風とか諸々のせいで狙いが上手くいかなくて倒すのが中々上手くいかなかったと聞いた。自分が実技試験2位、総合1位だという事は言わないでおこう、と小心者な私は思いました。

B組の前で希乃子ちゃんと別れてすぐにA組の扉に着く。

(扉が大きいです…大型の動物やら何やらの個性を持った人にも対応できるようになってるんですね。)

深呼吸をしてA組の扉に手をかけて開ける。割とすぐ近くにちよつと好きじゃない眼鏡の人が居た。

音でこちらに気付いたのかこつちに来ました、慌てて挨拶をします。

「あ、お、おひやようございまして!!」

「凄く噛んだな!」

俺は飯田天哉、同じA組としてよろしく頼む!」

ただの挨拶で3回噛んでしまった。やっぱりキャラじゃないですね、これ…

一回私の噛み噛みの挨拶にツツコミを入れた後に凄くロボットみたいな動きで手を動かしつつ自己紹介をしてくれました。

第一印象はあまりいい感じじゃなかったですけど、話してみると案外普通に話せそうなタイプな気がします。

「あ、だ、ダフネ・ル・フェイって言います、よろしくお願ひしませう!

あう、また噛んじやいましたあ…」

「もしかして、話すのが苦手なタイプか?無理はしなくていいぞ?」

緊張しすぎていたせいで余りに嘔み過ぎていたら、心配してくれました。

多分この人は真面目過ぎるだけなんだろうなあ、と何となく思います。

「だ、大丈夫です…緊張しすぎなだけですから…」

「そうか…とところで、座席表を見たところ出席番号順に座るらしい。自分の出席番号を確認したらそこに座ってくれ。」

「ありがとうございます…何から何まで…」

「気にするな。俺のやるべき事をしただけだからな。」

頭を下げて礼を言って、座席表で示された席に座る。教室の後ろから見て左から2列目、前から3つ目の席でした。隣は緑谷君だったので知り合いです、後は誰だかさっぱりです。

席に座って数分後、ある程度人が集まるまで凄く目につく生徒が入って来た。頭がツンツンしていて、いかにも唯我独尊な感じのあふれる男の子。座った場所は緑谷君の前。確か座席表での名前は爆豪ばくごう 勝己かつぎ君。

足を机の上に置くとか座り方の柄が悪いなあ、と思いました。というか制服の着崩し方が不良のそれです。怒られますよ?

案の定飯田君が爆豪君を注意しに行つて口論が始まりました。爆豪君は外見通り性格が乱暴で、なんというか「THE・不良」って感じがします。

「…んで、そのテメエ、さつきから何ジロジロ見てんだ。ぶつ殺すぞ」
「ひつ、ご、ごめんなさい…!」

凝視し続けてしまったからか、口論の途中で爆豪君がこつちを向いてきた。視線が怖くて急いで机の上に伏せて縮こまる。

「爆豪君! ダフネ君が怯えているだろう!」

「ああ?」

またドアが開く音が聞こえたからそつちをちらつと見ると、見覚えのある緑っぽい色の髪の毛の男の子、緑谷君が居た。何故か凄く、「一番クラスメイトになって欲しくない人がいる!!」って顔をしていますね。

でも彼も受かっていたんだと思って少し恐慌状態から抜けられました。そうしてまあまあクラスのメンバーがそろって喧しくなって来たところで。

「お友達ごっこなら余所でしょう。ここはヒーロー科だぞ。」

突如としてミノムシみたいに寝袋に入った男が現れて喋り始めました。

10秒で栄養をチャージするアレみたいな奴を一気に飲み干した。地味にあれって10秒で飲み切るの大変な事ありますよね。それを数秒で飲み切るって結構凄い人なのでは?と真面目に考えていると、皆が静かになっていました。

「…ハイ、静かになるまで8秒かかりました。時間は有限。君達は合理性に欠くね。」

（いきなり現れてよくわからない事言われています…!そもそも私、ファーストコンタクトで嘯みまくったせいで飯田君に心配されて、爆豪君を凝視しすぎてオラつかれた以外何もしてない!?)

ミノムシの男にいろいろ言われている間に冷静になってこれまでの自分を振り返ってハツとなる。

そういえば友達を作ろうと思っていたのに、気づいたら縮こまつてるだけだった。

気付けばミノムシから人間に戻っていた。けど服が黒一色。そういうコスチュームなのかな?あと首に巻いてる布も気になる。

「担任の相澤消太だ。よろしくね。」

早速だが、全員今から体操^コ服^レ着てグラウンドに出ろ。」

え、それ体操服ですか?入学式とかするのではないんですか?雄英高校は入学式前に皆でレクリエーションでもするのでしようか?

【A組の担任は破天荒な人でした】

いきなり担任の相澤先生にグラウンドに出ろと言われて、よくわからない内に体操服に着替えさせられました。

これから何が始まるんだろうと首を捻っていると、担任が現れた。

「ハイ、皆集まったね。それじゃこれから個性把握テストを行う」

「「個性把握テストオ!!」「」」

「入学式は!? ガイダンスは!?」

皆がびっくりしてる中、私は吃驚した人達の大声で縮こまっていると、女の子が当然の疑問を投げた。

それはそうだ。言われてみればもうそろそろ入学式の入場の時間だった。

「ヒーローにそんな悠長な時間をしてる時間はない。雄英高校ウツは自由な校風が売り文句、そしてこれは教師側も然り。

……爆豪、中学校の頃のハンドボール投げ、記録幾つだった?」

「67m」

え、67? それって割と普通に凄くない? 私が最高速に到達するのに必要な距離くら

い飛んでるよ?!

「じゃ、個性使って投げてみる。円の外から出なければ何をしても良いよ」

爆豪君はそれを聞いて嗤った。やっぱり顔が怖い。

ボールを握りこんで爆豪が思いつき振りかぶった。

「んじやまア……死ねエ!!」

掛け声が「死ね」!?気合の入れ方が新しいね!?

ともかく、結構な速度を伴って飛んで行きました。低めに見積もっても500mは飛ぶと思います。

「まず自分の最大限を知る。それがヒーローの素地を形成する合理的手段」

ピピっという音が鳴った後、先生が手に持っていた端末の画面をこちらに向けてきました。

その画面には「705.2m」という値が書かれています。恐らく先程のボールに計測機構が備わっていたのでしよう。謎技術再びです。

なんでそういうところだけ優れてるんでしょうか。

「……なんだこれ!すげー『面白そう』!」

「705mってマジかよ!」

「個性を思いつき使えるんだ!流石ヒーロー科!」

うう、この盛り上がりの空気が過ごしづらいです。何故かわからないけど相澤先生の目が怖いですし。

「面白そう……か。そんな腹積もりで3年間ヒーロー科に居るつもりか？」

ひい、やっぱりこの先生怖いです！助けて希乃子ちゃん！ヘルプ！

「よし分かった。この個性把握テストでトータルの成績が最下位だった奴はヒーローの資格無しと判断し、除籍処分しよう」

この先生ヤバイ人ですね!?なんで教職に居るんですかこの先生!?校長先生人選間違えてないですか!?

「生徒の如何は先生の自由。ようこそ、此処が雄英高校ヒーロー科だ」

この先生暴君です……希乃子ちゃん、私は今すぐB組に移籍したいという気持ちに溢れています。今ならこの感情でアクシズも止められそうです。

「最下位除籍つて、まだ入学初日ですよ!?いや、初日じゃなくつても理不尽すぎます!」

女の子の一人が先生に向かってブーイングしましたけど、先生はそれに対して涼しい顔をして答えました。

「自然災害、大事故、身勝手な敵。

日本は理不尽にあふれてる。そういう理不尽を乗り越えて行くのがヒーロー。

放課後マツクで談笑したかったならお生憎。これから三年間雄英は全力で君たちに

苦難を与え続ける。

……『Plus Ultra』だ。全力で乗り越えて来い」

挑戦的な笑みでそう告げてきました。校訓の悪用が過ぎる気がします。でも、まあ進退がかかっているので許されてる限りで真面目にやろうと思います。

なので私は、先生に申し出をする必要がありました。

「あ、あの……先生、装備変えても良いですか？これ、日常生活用なので運動性能は良くないんです……本当だったらアレをずっとつけてればいいんですけど、普段からつけるのも仰々しいし制服着るのに邪魔で……」

「……まあ、いいだろう。急げよ」

先生は私の大きな荷物を思い出したのか、少し考えた後に許可を出してくれました。

「お待たせ、しました……」

ちよつと恥ずかしいが可動域を広くする為だからしょうがない。体操服のズボンも太ももまでまくり、機械の四肢である【Beatrice】を惜しげもなく晒した姿で戻りました。

「大丈夫だ、そこまで時間はかかってない。じゃ、全員揃ったし始めるぞ」

第一種目「50m走」

先程私を心配してくれた飯田君が3秒04と言う記録をいきなりぶん投げてきました。凄い個性だなあ、速度だけなら今の私と同等かも。

まあまあ時間が経って私の順番が来る。

「君が俺のペアか。俺は常闇踏影、よろしく頼む」

「だ、ダフネ・ル・フェイです。よ、よろしくお願いします」

常闇君から挨拶をされたので、慎重に返しました。今度は嘯まずに言えたので内心そつと胸を撫で下ろしています。

それにしても常闇君のこれは被り物なのでしょうか、それともそういう身体なんでしょうか。

スタートの合図に合わせて、一気に走り出します。勿論本気です。50mじゃトップスピードになる前にゴールについてしまいますが仕方ありません。

『ダフネ・ル・フェイ、3秒67』

ゴールと同時に全身を反転する事で停止しました。トップスピードまで5秒以上かかるのは少し問題だと思ってます。お姉さまはすぐに時速100kmに到達できますから。

それにしてもお姉さまの「常に「Beatrice」は持ち歩いておけ」って助言がここで役に立つとは思いませんでした……

第二種目「握力」

個性で作ったものとはいえ万力を使うのってありませんか？あと障子って人が素で540kgつていう数字を叩き出していました。怖い。

ちなみに私は200kgでした。普通の既製品よりも握力が比較的強い理由をお姉さまに聞いたところ、「ゴツドフィンガーしやすくする為」だそうです。貴方ネオジャパンの出身ですか？

第3種目「立ち幅跳び」

悩んだ結果、全力で飛びました。本当はジアドスフィアを使えば理論上かなり遠くまで飛べるのですが、それをやると皆死んじゃうので駄目です。

結果は4m50cm、人間としては十分バケモノの数値ですね。

爆豪君、あれどこまで飛ぶんでしょう。

第4種目「反復横跳び」

峰田って人が滅茶苦茶ばよんばよんしてました。楽しそうだから触ってみました、剥がれなくて困りました。

仕方ないので触れた部分を足の突撃衝角でめちやくちや薄く削ぎました。金属部分

なのであまり痛覚はありませんでしたが、自分が人間以外の何かになっちゃったのを痛感してやっぱりいい気分はしませんね。

その後普通にやりましたが、結果は76回でした。

第5種目「持久走」

八百万さんのバイクはチートだと思います。まあ最高速度で5分間走るくらい余裕ですけど。

結果はざっと8km。一応トップの成績は取れました。ところで八百万さんはバイクの免許を持っているのでしょうか：いや、考えない様にしましょう。

第6種目「上体起こし」

尾白君って人が早かった。私は普通でした。

記録は58回です。

第7種目「長座体前屈」

オートセパレートを使って伸ばしました。

最終結果はオートセパレートで戻れる距離ギリギリで10m。長座体前屈で出る記録ではないですよ。これをやったらちよつとみんなの顔が引き攣ってたけどまあいいや、と諦めました。

第8種目「ソフトボール投げ」

私自身は特に何も考えず投げて終わりましたが、緑谷君はこれまで全部ドベ、相当焦っていました。

緑谷君が肝の据わった目をして投げましたが、結果は46m。緑谷君は呆然と自分の手を見ていました。

その後相澤先生が二言三言話した後、2回目を投げました。今度は凄く遠くに飛んでいきましたけど、右手の指が酷く損傷してました。

その後爆豪君が何か言いながら飛び出しましたが相澤先生の首の布が捕獲して止めました。それ一応武器だったんですね。

あの二人の間には色々因縁がありそうだと思いつつ、結果発表を見ます。

あ、ちなみに私は180m飛ばしました。射撃武器が手持ちにあつたらもつと飛ばせたいんですけどね。

結果は4位、表彰台にはぎりぎり立てませんでした。

そして最下位は緑谷君、悲しい表情をしている緑谷君を前に、先生はあつけらかなと言いつちました。

「ちなみに除籍は嘘な」

みんながまた驚きの声をあげました。私も眼を見開きました。

後ろにいた女の人はごちゃごちゃ言ってますが、除籍処分を言い出した時は本当にそ

うする気だったと私は思っています。

最初こそ理不尽な暴君だと思いました（今もちよつと思ってる）が、行動とその前後での緑谷君の動きや身体の状態を見ただうえでの感想だと、ヒーローに対する思いは人並み以上あるように思えました。

どちらかと言うと、有能と無能を篩で分けてるような感じだと思っています。

ともかく、個性把握テストも終わって解散になったので普通に着替えて帰宅しようと校門に向かったら、そこで希乃子ちゃんが待っていてくれました。

「ダフネちゃん！入学式で見かけなくて心配したノコ！一体何してたの!？」

「じよ、除籍をかけた個性使用OKの新体力テストです。多分。才能の無い人はあれで落とすつもりだったんだと思います。

……ぶっちゃけ担任の先生が怖いよ……希乃子ちゃん助けてえ……」

「流石に担任の先生からは無理ノコ、クラスも違うし」

「無慈悲！」

そんな感じで私は希乃子ちゃんに今日あった事を話しながら帰路に就きました。

【戦闘訓練の時間。その1】

相澤先生の「除籍処分を懸けた個性把握テスト」の次の日から、雄英高校の授業が本格的に始まりました。

午前中は普通の高等学校と同じような座学です……先生の癖が強い事を除いて。

英語のプレゼントマイク先生を例にすれば、やってる内容は普通の授業なのにテンションの高さだけが普通と違い過ぎて何とも言えない感じになってます。

そして今は昼休みで、この時間が過ぎると午後の授業なのですが、ヒーロー科は午後から「ヒーロー基礎学」という科目が入っています。今日が最初の授業なので、少し楽しみな私が居ます。

昼ご飯（今の私にとって人間の食事は娯楽以外の何物でもないのですが）はいつもラUNCHラツシユさんのやっている食堂で食べています、今日はシンプルに生姜焼き定食を選びました。

どんな料理も一流で作れるって凄いですよね。女の子として憧れます。

私は朝食以外のご飯派なのでいつも白米を一緒にしているのですが、登場する度に「最終的に白米に落ち着くよねー」って言うのは決め台詞か何かだからなのでしょうか。

同意しますけど。

ちなみにお姉さまは土曜日の昼ご飯はパン派らしくて、朝ごはんにこだわりはないらしいです。

そんなこんなで昼休みが終わり、午後の授業の予鈴が鳴る前に教室に入って先生を待ちます。

「わーたーしーがー……普通にドアから来た!!」

登場の仕方が特徴的でした。あの体重の掛け方されて良く大丈夫ですなあ。確かに体重が270kgくらいでしたっけ？

そして予想以上に見た目の圧が強いです。一人だけ生きてる世界違いませんか？

そして誰かがあれが「シルバーエイジ」なる時のオールマイトのコスチュームと言っていました。老年層シルバーエイジの事でしょうか？ひよつとしてオールマイトはおじいさんだった？

オールマイトが……フリップ？カード？まあそんな感じの物を取り出して私達に向けて見せました。そこには「BATTLE」と特徴的なフォントで書かれていました。

「さて、早速だが今日はコレ！戦闘訓練をする！それに伴って……」

何かオールマイトがボタンを押すと、壁が大きな図書館にある本棚を丸ごと引つ張るタイプの本棚みたいにせり出してきて、中から番号の書かれたトランクが出てきまし

た。

「何ここ、本当に学校ですか？税金が無駄遣いされてませんか？」

「入学前に送ってもらった個性届と要望に沿って作られたコスチューム！これに着替えたらグラウンドβに集合だ！」

「ああ、面倒臭くてお姉さまにデザインを頼んだ奴ですね。確認はしてませんが、お姉さまが暴走して変な物にはなつてないと信じましょう。」

「……着て見ましたけどこれ、明らかに子供っぽい……」

「お姉さまがデザインしたコスチュームを着てみましたけど、感想がどうしてもこうなつてしまいます。」

「女物っぽいジャケットにワンピース。どちらも白系統の色でまとめられていて首元と左の二の腕に布の薔薇があしらわれています。お世辞にも戦闘員には見えませんね？」

「まあ今回は足と利き腕^右以外は【素体】で行くつもりだし、それ以外も著しく人型から外れているわけでもありませんから問題はありませんが。でも、ちゃんと四肢に仕込ま

れた武器に服が干渉しない様にちゃんと作られてるのは凄いですね。外からは普通の服にしか見えないのに。

しかも説明書によると謎の超技術である程度の防刃性もあるんだとか。なんでこんなに技術が偏ってるんでしょうね。まあ、それよりも気になるのはコスチュームに付けられた武器です。

なんでわざわざジャケットの内側に折り畳み式にしてまでボールが入ってるんですか？しかも名称が「ボールのようなもの（お姉さま命名）」って完全に狙ってますよね？私は宇宙CCCを伝承してるわけではないし、教えてもらってもないです。

でも、服の内側にジアドカードリッジを付けてもらえたのは嬉しい。

「まあ、お姉さまが考えてくれたんですから着ますけど……お姉さまはボールが好きなんですしょうか？」

腕と足を換装して、他の皆の後を追う。

今回使用するのは両方とも新しく使うパーツ、右手が【A—Bernadetta^{ベベルナデッタ}】、脚部は【A—VEILAI^{アヴェイルアイ}—M^ム】です。

近接戦闘に特化した右手とアンカーで急減速や壁面に停止する事が出来る脚部。【Beatrice^{ベアトリーチェ}】に比べて比較的近距离での変則的な機動を目的としたものです。

ベアトリーチェに比べて流線形なのでどちらかといえばこちらの方が見た目は女性

的かもしれませんね。

そしてグラウンドβの入り口周辺で皆と合流して入ります。皆のコスチュームを見渡したところ、白い全身鎧の人が誰か気になります。お姉さまに知識として教えて頂いた「Air get Lam h^{ァー ジェ ト ラ ム}」はあんな感じなんですかね。

「格好から入るってのも大切なことだぜ少年少女。自覚するだろ？ 今日から自分は「ヒーロー」なんだと!!」

オールマイトの言葉に皆が期待に満ちた表情をします。これがNo. 1の威厳なんだなあ、と思いました。

ていうか緑谷君のコスチューム露骨にオールマイトによせてますね!? オールマイト笑っちゃってますよ!?

「先生！戦闘訓練とはこのグラウンドで行うのでしょうか!」

全身鎧、飯田君だったんですか。全く誰か分からない。というかあのトランクにどうやって入ってたんだろう。ともかく飯田君がオールマイトに質問しました。

「いや、その二歩先を行く！今日やるのは『屋内戦闘訓練』だ!」

「屋内戦闘、ですか?」

その声に答えるようにオールマイトが大きくうなづく。

「そう！真に賢しい敵は屋内に潜む！そこでヒーロー側とヴィラン側、各二人ずつで

チームを組んで戦闘訓練を行う！何か質問はあるかい？」

……いきなり高度な訓練だなあ、と思いました。1対1タイマンなら力業でどうにかかりますけど、2対2だと連携を考えなければいけないですから。

オールマイトが質問を促すと、皆が口々に質問をし始めました。

「屋内戦闘と言いますが、勝敗の基準はどのようなのでしょうか!？」

「選出はオールマイト先生が行うんですか?」

「ブツ殺しやあいいんだよなア?」

「ンンンン！聖徳太子イー!」

一つ凄い物騒な質問があつた気が……絶対声の主あの殺意が高そうな全身手榴弾ばい見た目の爆豪君ですよね……

絶対に相手にしたくないです……

なんか急にオールマイトがポケットを漁つたと思つたら、紙を取り出しました。
「いっぺんに説明させてもらおう!今回の戦闘訓練の設定はこう!」

核爆弾を持ったヴィランがビルの中で籠城している!ヒーローはビルの入り口からスタートし制限時間内に核を確保、ヴィランはビルの中でスタートし制限時間までに核を守りきるのが条件だ!」

設定が物騒ですね!?!そんなホイホイ核爆弾持ち出されなくてください!?!ていうかさ

れカンペですか!?

「ヒーローチームはヴィランチームがビルに入ってから10分後にビルに入る事。その10分間の間にヒーローチームはビルの中を索敵するのも、ヴィランチームは罠を張るのも自由!」

そして核以外にもう一つ、勝敗を決めるのがこの「確保テープ」!これを相手の手首に巻きつけたら巻き付けられた人はその場で失格!チーム二人ともテープを巻かれた場合はその時点で勝敗が決まる!

なお、核は本物として扱う事だ!ちなみに核の確保に関しては、ヒーローチームのどちらかがタツチできた時点で勝利としよう!」

成程、纏めると

ヒーロー側の勝利条件

・ 時間内に核爆弾にタツチする

・ ヴィラン側の二人に確保テープを巻き付ける

ヴィラン側の勝利条件

・ 制限時間まで核爆弾を守り切る

・ ヒーロー側の二人に確保テープを巻き付ける

って事ですか。しかもヴィラン側には10分の準備時間があり、ヒーローは爆弾がど

ここにあるのか初期状態では分からない。ヒーロー側は比較的不利な設定ですね。

そしてオールマイトが？の書かれた箱を取り出しました。

「そして、チームはこのくじ引きで決める！」

……自分で相性の良い個性を選ぶ事も出来ない、ですか。

飯田君が何故なのか質問したけど、きつちり説明されて素直に引き下がった。飯田君、真面目過ぎて将来悪い人に騙されないか心配ですね。

そして、くじ引きによってチーム分けが決定しました。

「……よろしくお願いします、芦戸さん」

「うん、よろしく！ダフネちゃん！」

凄く明るい人ですね。それとどことなくピンク色の肌がと角が人外な感じを醸し出しています。

問題なく映像を見られるけど皆から少しだけ離れたところで作戦会議をしようと言つて誘いました。

「その、芦戸さんの個性って何ですか？」

「アタシ？アタシの個性は『酸』だよ！簡単に言うとは身体から酸性の液体を分泌できるんだ！

作戦を立てるって言うてたけどさあ、ダフネちゃんの個性ってなんなの？

そういうば足と右手のアーマー、個性把握の時と違うよね。そういうアーマーを身体につけたりするのが個性？あ、でも長座体前屈の時思いつき腰から外してたしなあ……」

「あ、いえ。間違っては無いですけど……びっくりしないでくださいね」

そう言うて右手をこっさり外して振り回す。芦戸さんがびっくりして声をあげそうになりましたが急いで自分で口を塞いで声を殺してくれました。

「え、ええ!?何それ!?!」

「お姉さまが命名したのですが、個性の名前は『イルドナーク』。機械の身体を持ち、ジアド粒子という特殊な粒子を動力として動く生命体らしいです。

それに追加して、右手、左手、胴体、足の四つのパーツを自在に入れ替える事が出来、これによって多数の戦況に対応できるらしいです。

今回は対人なので蹴り一発が凶器になる【Beatrice】は使えませんから代用品として【AVERIA】を使います。右手の【Bernadetta】は単純にぶん殴るのが得意ですね」

右手を元に戻しながら説明すると、芦戸さんがびっくり顔で固まった。え、ピグマリオンになっちゃいました!? ジアド粒子漏れてましたか!?

「い、いや、大丈夫だよ。急に早口で喋ったからちよつとビックリしただけ。」

……とにかく、近距離型って事だよね」

「はい。序でに言うと言脚部のアンカーを上手く使えば壁面も登れます」

「なんでもありだ!」

芦戸さんはリアクションが大きいですね。相手側の感情表現が豊かなせいかなんですか話しやすいです。

そんな話を話していると、最初の組、ヒーロー側の緑谷君、麗日さんペアとヴィラン側の爆豪君、飯田君ペアの試合の始まりを告げる合図が鳴りました。

【戦闘訓練の時間。その2】

チーム分けが終わって、いよいよ初戦が始まります。

初戦はヒーロー側が緑谷君と麗日さん、ヴィラン側が飯田君と爆豪君です。

私達は訓練場所のカメラの映像が見られる場所に移動して観戦です。見た感じだと現状ではヒーロー側の方が意思疎通ができていそうです。っていうかヴィラン側は爆豪君が独断専行しようとしていますね。

準備時間が終わり、ヒーロー側がビルの内部に入りました。カメラから見える映像では二人で即席のハンドサインを作り会話なしでの意思疎通をしています。

初めてのはずですが、二人の間での連携はそれなりに出来ていそうです。

(これはまだ最初だからどんな戦法が良いか互いにまだ把握しきれていないです。だからこそ、この初戦は流れを取った方が勝利に近づく、と言ったところでしょうか。)

静かに訓練を観戦しながら分析をしていましたら、爆豪君が綺麗な奇襲を決めました。あの派手な個性でよくあんな上手く奇襲できますね。それを回避した緑谷君も凄いですけど。

爆豪君が緑谷君に右の大振りで攻撃を仕掛けましたが、それを読んでいた緑谷君は綺

麗に投げを決めてました。

カメラにマイクが無いのでなんて言ってたのかは分かりませんが、表情からして爆豪君に何か啖呵を切ったみたいです。

その後は麗日さんが核爆弾の場所に到達した物の飯田君の迫真のヴィランなりきりに笑ってしまったって居場所がバレてました。気付いた飯田君の「君の個性への対策でこの部屋を綺麗にした」発言で堪え切れず私も笑ってしまいました。飯田君は真面目過ぎるけどそれが一周回ってユーモアになってます。

爆豪君と緑谷君の方に目を移すと、爆豪君が色々探し回ってやっと緑谷君を見つけました。

右手の手榴弾の籠手を何やら弄って緑谷君に向けます。個性の原理が分からないから良くわかりませんが、私はアレが気安く人に向けていい物じゃない事は何となくわかりました。

直後、カメラの画面が爆炎に包まれ、思わず私は眼をつぶって身を縮めてしまいました。

何とか緑谷君は無事だったものの、ビルの正面に派手に穴が開いていました。チートですか。

私も武装を使えばアレくらいはできますけど、それをホイホイ生身で出さないで欲し

いです。あ、いやあれは籠手に何かしら蓄積してたから生身ではないと判断していいのでしょうか？

その後は爆豪君が類まれな戦闘への才能を見せつけたり、麗日さんが自分を無重力にしたり、飯田君が核を抱えて麗日さんを躲し続けたり（今の飯田君の言動を見ると思い出し笑いでしてしまいます）してヴィラン側が優勢に進めてました。

ですが、最後に緑谷君が個性を利用し片手を犠牲にして拳で五階までの風穴を開ける事で強引に麗日さんが使える武器を作成し飯田君に隙を作り、麗日さんが核にタッチしました。その時の飯田君の動きがコミカルでまた笑っちゃいました。

緑谷君が保健室に運ばれた後、オールマイトが私達の方を向きました。

「さて、緑谷君以外は戻ってきた事だし訓練の講評をしようか！

ちなみに今回のMVPは飯田少年だ！なんでかわかるかな？」

飯田君はびっくりしていました。私は妥当だと思いました。

その後、八百万さんがその理由をきっちり説明した。分かりやすかったので私は説明の仕方が参考になるな、と思って覚えておくことにしました。

オールマイトがちよっと焦ってた気がします。どうしたんでしょう。

次は轟君と障子君（両方とも名前しか知らないですね）がヒーロー側で、ヴィラン側

は尾白君と葉隠さん（服は透明にならないって事はアレほぼ全裸って事なんじゃ？）ペアの訓練で、結果は轟君が氷で瞬殺して終わりだった。話す事がない戦いでした。

その後もう一組を挟んで私達の出番が来ました。私達はヴィラン側で、相手は砂藤君と口田君。どっちも見た目から個性が把握できない。

「芦戸さんは二人の個性わかりますか？」

「んー、砂藤は何となくパワー型な感じがするけど、正確なところはわかんないや。口田もよくわかんないなあ。」

つまり事前情報はほぼなし。核の場所はバレると仮定して…

「とりあえず一番上の階段から一番遠い部屋に核を配置してもらってもいいですか。後、芦戸さんはそれ持ち運べそうですか？」

「オツケー。持ち運べなくはなさそうだけど、なんで？」

芦戸さんと核を設置しながら作戦を少しずつ立てます。芦戸さんの「酸」は応用幅が広い個性なので、うまく使えば化けると思います。

「非常時に酸で地面を溶かして下の階に降りれるようにする為です。火種があつたら

ヘルカ式国防術
ヒーロー諸共自爆できるので良かったんですが。」

「死なば諸共作戦!？」

「いえ、私は核爆発程度なら防壁を張った上で爆発の衝撃をうまく回避すれば一応生き残れますので、実質勝ちです。」

「アタシの命は!？」

「私達は核を持って逃げ出す命知らずのヴィランですよ?そういうの考えても今更では?」

色々と酷い!?とショックを受ける芦戸さんを尻目に私は部屋の外に出ます。

「基本的に芦戸さんは核爆弾の周辺に居てください。此処は好きに使っても構いませんので。あ、芦戸さんの事ボスって呼びますね?そうしたらヴィランっぽさ増しそうですし。」

「おー!ヴィランのボス芦戸さんだよ!でも、ダフネちゃんはどうするの?」

「私は最善で二人、最低でも砂藤君を足止めします。このビルの凶面は割れてますから、5階から1階までの階段をぶっ壊して通行止めにしつつ1階で迎え撃ちます。」

後は通信機越しで、と言って部屋を後にします。残り時間は3分、妨害を作るのには十分な時間ですね。

残り30秒というところで1階から5階までの階段を塞ぎ切れませんでした。結構ギリギリ

りでしたね。あとは1階で待ちます。

ヒーロー側の二人はスタートの合図から1分も経たずに私のところまで来ました。やっぱり核の場所がバレてましたかね。

「…悪いですが、此処から先は通行止めです。此処を超えなければ私の屍を超えてゆきなさい。」

「同じく悪いが、本気で行かせてもらおう!」

ほぼ全身黄色タイトの砂藤君が白い何かを口に入れて本気で攻撃してきました。

壁に拳が当たって1拳にダメージが行く様に立ち位置を調整したが、逆にその威力を目にする事になりました。

何ですかあの壁のクレーター。どんな威力で殴ったんですかね。

「口田、行け!」

口田君に先に行くように促しましたが、口田君が首を振ります。どうやら道が塞がれている事に気付いたみたいです。

「えへへ、階段を塞がせてもらいました。外からよじ登るもよし、私を倒して地道に掘るのも良しですよ?」

「チイツ! 派手にやるなあ!」

拳をいなしつつ懐からボールを取り出し組み上げて右手に構えて懐からジアドカー

ドリッジを腕に叩き込み、「打撃形態」を発動し右手が変形、ボールの横薙ぎの一撃が脇腹に思いつきりぶち当たりました。「打撃形態」による追加攻撃も合わせて思いつきり壁に叩き付けました。空になったカードリッジを排出し、元の右手に戻します。

砂藤君は一度置いておいて口田君にボールを向けて告げます。

「降伏しますか？痛い思いはしたく無いですよ？私も暴力はあまり好きじゃないんですよ。」

「…!!」

首を振って拒否されました。やっぱりダメですか。後遺症が残らない様に細心の注意を払いながらボールで頭を叩きつつ後ろに回って確保テープを口田の手に巻き付けた。

「これでひと…きやつ!？」

手に巻き付け終わって安心したところで横からパンチを思いつきり喰らう。凄い威力で殴られたせいで階段から一気に廊下まで弾き飛ばされる。その後の轟音から妨害が突破された事を悟り、連絡を取ります。

「芹戸^ホさん、ごめんなさい。一人捕まえましたでしたが逃しました。これから先回りしに行きます。」

『わかった。二度の失敗は許さないぞ。』

「凄くブラックなヴィランだった!」

芦戸さんの謎に低い声(多分ヴィランのボスをイメージした物)を聞いて突っ込みつつ窓から外に出て脚部アンカーを悪用して壁を駆け上がって4階に上がって行く。

ギリギリで追いつき、ちょうど四階まで上がって来た砂藤君と対峙する。

「おいおい、早すぎるだろ!」

「頑張ったので!」

かなり雑な答えで返しつつ、再び対峙する。ボールを振りかぶって攻撃しに行ったが片手で掴まれてボールを投げ捨てられた。

「これがかかなり威力高いからな!」

「あーっ!お姉さまのボールが!」

砂藤君、微妙な顔をしないでください。実際「お姉さまの(デザインした)ボール」だから良いじゃないですか。

ともかく、砂藤君のパンチのラッシュを躲して時間稼ぎに徹する。

1分も躲していると段々砂藤君の動きが落ちてきた。

「だ、だるい…ねむい…」

「えっ」

今度は私が微妙な顔をする羽目になった。

一定時間過ぎると脳機能が低下するけど、それまで全身を強制的に活性化させる個性なんですかね？ピーキーな個性だなあ。

パンチの切れが目に見えて落ちて行っただころで左手から「アサシンブレード」を展開して首元に着ける。

「降参しますか？」

「…す、する…」

『ヴィランチーム、WIIIIIIIIIN!!』

オールマイトのアナウンスが終了を告げた。

【戦闘訓練の後日談とB組の人と会話】

「さて、今回の戦闘、MVPは誰だと思うかな!？」

私の訓練が終わった後、オールマイトは皆にそう問いかけました。

八百万さんが手を上げて発言します。

「やはりダフネさんではないかと思えますわ。」

開始までに階段を塞いで進む道を阻みかつ自身は一階で待機し相手を分断しにかかり、事実一人を確保しました。

砂藤さんに抜けられたのは失敗でしたが即座にカバーし持久戦を展開、結果的に二人を無力化する事に成功しましたから」

「うん!だそうだが、ダフネ少女!今回の訓練はどうだったかな!？」

「えっ?!？」

いきなり話を振られてうろたえてしまいました。急いで返答しようと慌てて言葉をまとめます。

「そ、その……高く評価していただけたのは嬉しいですが、まだ至らない点が多いな、と思います」

「うん、その理由は何かな?」

「えと、まず今回の序盤で妨害手段として時間が少なかつたのも単純に階段を破壊しましたが、現実的には悪手です。これは相手がごく少数かつ地面を歩く相手だったから成立した手法です。」

それと、一人を無力化した際にも油断してしまつたせいで一撃をもらい砂藤君が妨害を突破するだけの時間を与えてしまいました。

そして、追撃の為に窓の外に出て駆け上がりましたが、これも外にも相手がいる可能性も考慮すれば悪手でした。

そしてボールを奪われたのも問題ですが、一番大きいのは芦戸さんの使い方です。芦戸さんの個性を利用すればもつと別の策を用意する事も出来ました……

私だけが先行した結果砂藤君が4階まで到達してしまいました。大いに反省すべき点です。

……ですが八百万さんの言葉で少し自信がつかえました。ありがとうございます」

慌てて真面目に全部反省点を答えようとしたら一息にたくさん言つてしまいました。あう、皆の目が気になります。

ていうかオールマイトまでなんでそんな顔をしてるんですか。「思つてたより言われた!」って顔ですけど。緑谷君の時に八百万さんにいろいろ言われた時と同じ顔してま

すよ？

「んん！八百万少女の言う事も確かに事実だ！だが、ダフネ少女の言う通り、完全にいい所ばかりではなかったね！

だけど今回、砂藤少年に抜かれた後にも次の策を用意していた点もあるから MVP はダフネ少女だ！ただしいくら偽物の核とはいえ自爆作戦を実行するのはやめてね！

現実ではそういう事もありうるけど、今回ヴィラン側は核の防衛がミッションだからね！」

それ今突っ込みますか？実際にはやらなかったから良いじゃないですか。

……「火種があつたら実行する」って言っちゃったからですかね？

そつと芦戸さんに近付く。

「ごめんなさい……もうちょっと色々考えてればもつといい策があつたかもしれないのに……私が突っ走つたせいで芦戸さんがただの案山子みたいになつてしまいました……」

「いやー、そんなに気にしなくても良いって！ダフネちゃんの作戦に乗つたのあたシなんだからさ！もつと自信もつて！」

「……は、はい！」

背中をちよつと強くはたかれました。底抜けに明るい人に勇気づけられるとなんだ

か少し「自分も出来るかも」って感じがしていいですよね。

ちよつとだけ胸を張って答えたら、芦戸さんが目を合わせて笑いかけてくれました。芦戸さんは人を勇気づけるのが上手だなあ、と思いました。

そして最後の一組の訓練が終わり、教室に戻ります。

手早く荷物をまとめて帰宅しようとする、赤い髪の男の子が近寄ってきました。確か、切島君でしたっけ。

「……あのさーこれからみんなで戦闘訓練の反省会すんだけど、お前も来ねエか？」

爆豪はさつき帰っちゃったけど……」

「……そうですね、参加します。皆と、友達になりたいので」

「おお！ありがとなー！じゃあ少し待っててくれ！緑谷ももうすぐ戻ってくるらしいからなー！」

そうなんですか。リカバリーガール……アレはおぼあちゃんガールなのか？の個性って結構凄いですね。

少し輪から離れたところで皆の話を聞いていると、教室の扉が開いて、緑谷君が戻っ

てきました。

切島君が先頭切って緑谷の下に行つてそれにクラスの下半分くらいがついて行つて口々に自己紹介してました。

緑谷君は爆豪君を捜しに来たらしくて、切島君がまだ出て数分だと言つたら飛び出して行きました。何か言いたい事があつたんでしようか。

切島君達が訓練の話をしていると、突然切島君が私に聞いてきました。

「そーいや、ダフネがをパールでぶん殴つた時、右手になんか棒を嵌めた後に腕が変な形に変わつてたけど、あれ何なんだ？一発であの体格差をひっくり返せる程の凄い威力だったけど」

「あ、あれは……〔Bernadetta〕つていう腕についている拡張機能の一つ〔打撃形態〕つていって、鈍器を使った攻撃の時にカードリッジを使用する事で威力を倍増させることができます。お姉さま謹製の義手です」

「えっ、あれ義手なのか!？」

「あ、えつと……」

あわあわとどう説明した物かと両手で変な舞をしていると、芦戸さんがフォローに来てくれた。

「そーいう個性なんだって！確か『いるなー、ドク?』だったっけ?」

「なんかタイムスリップするデロリアン作りそんな人を読んでませんか!? 『イルドナー』です! どう間違えたんですか!?!」

フォローじやなくてボケでした。いや、アレは本気なんでしょうか?

「あーそうだったそうだった。……で、その『イルドナー』はねー、事前に用意する必要こそあるけど腕や足を工夫する事でいろんな状況に対応できるんだってさ!

ダフネちゃん、アレ見せてあげてよ、授業の時にアタシに見せた奴!」

「私は見世物じゃないですからね……? まあ見せた方が速いのはそうですからやりませうけど……」

そう言つて右手を外して左手に持つて振つて見せる。やっぱり皆が同じ反応をした。

「「はあっ!?!」」

「ごめん、皆! 遅くなっちゃつ……ダフネちゃん!? 腕が……!」

皆が驚いた顔をしてるところに、緑谷君が戻つてきました。外してる右手を見て顔が分かりやすく驚きとか色々な感情で顔がカオスな事になってます。

流石にびっくりしました。

「あ、あの、大丈夫ですよ、私がそういう個性なだけですから! スプラッターな絵面じゃないですから!」

「お、おう! ダフネ、さっさと戻してくれ!」

切島君に言われたので右手を元に戻します。念のため動作を確認しますが特に問題はなさそうです。

右手を振って緑谷君に「ほら、戻った」と見せると納得しました。

その後、ワイワイと戦闘訓練の反省を皆で仲良くしました。凄く仲のいい友達は出来ませんが、それなりに話の出来る人は増えました。もう少し内心みたいになまく話せたらいいんですけどね。

翌日になりました。

希乃子ちゃんと一緒に登校したら、門の目の前にたくさん報道陣が居て困っちゃいました。面倒なので希乃子ちゃんを抱えてジャンプしてすり抜けました。

他のクラスメイトが報道陣に捕まってましたが、まあ自分で何とかするでしょう。

その後、学級委員長を決める話がありました。投票の結果、緑谷君4票、八百万さん2票で、緑谷君が委員長で八百万さんが副委員長になりました。自分に入れるのありだったんですね。

そして、今日は希乃子ちゃんと一緒に昼ご飯です。今日はチキン南蛮を選びました。おいしいです。カロリーを気にしないでいいというのは安心できるところです。

「……そうだ、あそこに他のB組の人達がいるノコ。あの人達と一緒に食べない？また違う話が聞けるかもしれないよ」

「えっ……私が混じっても迷惑じゃないでしょうか……？」

「まあ約一人ほど気にする人が居ると思うけど、失礼な事を言ったら私がそいつの肺にスエヒロダケ生やしてやるノコ」

「発想が物騒ですね!?やめて下さい!」

まあ希乃子ちゃんが言うならその一人以外は大丈夫なんでしょうか。

取り敢えず希乃子ちゃんの後ろに隠れるようにそつとついて行きます。身長は私の方がちよつと高いくらいで、そう変わらないからできる事ですね。

そして、席に近付いて希乃子ちゃんがそこに座ってる女子に話しかけます。オレンジ色の髪って珍しいですね。

「ちよつと紹介したい子がいるんだけど、お昼ご飯一緒に食べても良い？」

「へえ、後ろの隠れてる子の事かな？良いよ。ほら、座って座って」

希乃子ちゃんが後ろを向いてじつと見えます。うう、隠れて何が悪いんですか、どうせ人付き合いになるとチキンな弱虫ですよ私は。

「……まあ、こうなるのはわかってたししようがないノコ。さ、ダフネちゃん、一佳ちゃんの前に座って座って」

「うえ!? 初対面の人の目の前にですか!？」

「人見知りには治そう? 一佳ちゃんは話しやすい子だから安心するといいいノコ」

「そ、そういう事じゃなくて……!」

希乃子ちゃんは私の言う事を聞き流してオレンジ髪の子の目の前の席を空けて座りました。時々思いますけど、希乃子ちゃんって意外と鬼じゃないですか……?」

諦めてオレンジ髪の子の目の前に座ります。初対面の人との会話は緊張します。ご飯にも中々手が付きません。

そんな時に相手から話しかけてきました。

「私は拳藤一佳。1年B組だよ。ダフネって呼んでもいいかな?」

「あ、は、はい。大丈夫です。ダフネ・ル・フェイです。A組です」

ガツチガチに固まってる、拳藤さんがまた話しかけてくれました。

「A組ってさ、入学式の時いなかったよね。何かやってたの?」

「えっと、除籍処分を懸けた個性使用有の体力テストを……」

「え!? そんなことやってたの!? 初日から飛ばしてるねえ、A組の担任……相澤先生だっけ?」

「はい。でもどちらかというで見込みの無い人間を篩い落とす最初の関門みたいなもの……だったと思います。」

本人からそういう意図でやったって言質は取っていませんけど」

へえー、と拳藤さんが相槌を打ちます。何とか想像上の姉みたいな人だと思いましたが。包容力と言いますか、そういう感じの雰囲気が強くて感じられます。

お姉さまがもう少しこんな感じで優しくかつたらなあ、と遠い眼をします。

「どうしたの、ダフネ。急に遠い眼をして」

「あ、いえ。ちよつと拳藤さんがお姉さまだつたら良かったなあって思つて……現実のお姉さまはそんなに優しくないので……訓練なのに本当に容赦ないんですよお姉さま……」

下手に喰らつたら頭蓋骨が押し折れる攻撃ですら本気じゃないってマジですか……」

「どんな訓練してたらそんな物騒な攻撃出て来るの!？」

「そういう逸話良く話してるけど、本当にあなたの姉は何者なの?」

「希乃子、これが珍しくないの!？」

「ダフネちゃんと一緒に帰つてる時に色々聞いたノコ。むしろこれは逸話の中ではマイルドな方ね」

「ちなみに、お姉さまは何故かいつの間にかサポートアイテム開発免許を取得していた全距離に対応して戦闘できる博士号を持った自称天才学者です……」

なんでそんなにいろいろできるのか聞いたら『なぜなら私がアメリカ合衆国大統領だお姉』

からだ!』と……」

「無駄にハイスペック!?なんでそんなどこかの第47代^{メタル}アメリカ大統領^{ウルフ}みたいな人なの!?

というか絶対言葉の節々に影響入ってるよ!」

気付いたら私の愚痴になってしまいました。それといつの間にか拳藤さんがツツコミ役に回っています。

そりや社会で普通に生きてたら頭蓋骨が割れるレベルの攻撃なんてされる事無いですよね。お姉さま手加減の言葉を知っても手加減が苦手過ぎてレベル1と50と100しかないですから……

そんな事を話していたら、突如として校舎中に警報が鳴り響きました。

「マスコミって常識がない人しかないんですか?」

お姉さまに関する話をしていたところ、突然警報が鳴り響いて学校内のスピーカーから音声流されました。

曰く「セキュリティ3」なる物が突破された、訓練ではないので早急に避難しろ、との事です。

周りの人が急にバタバタして出口に駆け込んでいきます。余りの喧騒にびっくりして、椅子から転げ落ちてしまいました。

「いたた：け、拳藤さん、希乃子ちゃん、『セキュリティ3』って何からの防衛策かわかりますか?」

「わからない！：けど、周りの人達の慌て方とわざわざ放送するって事から考えると、一番可能性が高いのは侵入者かも!」

「侵入者って、雄英高校のセキュリティを突破する人が居るノコ!?ここってセキュリティもトップクラスじゃないの!」

なるほど、それならこんな慌てるのも分かりますね。ほぼほぼ前代未聞の事態だから誰もこの状況に慣れていない、という事ですか。

取り敢えず周りの人に巻き込まれて離れ離れにならない様に一塊になって行動します。

「あ…あれ、そういうえば金髪の人？一応同じテーブルにいましたよね。気にしてませんでしたけど。」

「え、ちよつと待つて、本当だ！物間がない!？」

気付いたら同じ^ほテーブル^空にいた金髪の人（物間君というらしいですね）がどこかへ行っていた。

少なくとも今の状況で変な場所には行つてないでしょうけど、少し心配です。

ともかく出口近くまで行くと、空中に飯田君が浮かんで入り口に飛んでいく姿が見えました。何をやってるんでしょうか？ていうかどうやって飛んでるんでしょう。

非常口で書いてある所の上に変な姿勢で立ちながら大声を上げました。

「大丈夫ー夫!!」

ただのマスコミです！何もパニックになる事はありません！ここは雄英！最高峰に相応しい行動を取りましょう!!」

…ええ、マスコミつてもしかして今朝のアレですか？どういう事でしょう。

いくら本当に知りたい事がある時は無遠慮にプライベートにまで踏み込んで来る（お姉さま談）マスコミでも一般常識があると私は思つてます。学校への不法侵入で得たス

クープを出したとしてもバツシングが集まって酷い目に遭うだけです。

だから、普通マスコミがわざわざセキュリティを破壊する事はないと予測できます。だとしたらマスコミとは別人の行動によってセキュリティが破壊された?

「…なら、マスコミは囷で、他の目的が? 拳藤さん、少し集中しますので、私を運んでください。」

「え、うん、わかった。」

お姉さまが「便利なアクセスリは全部ついてるから、使い方も教えとく」で教えてもらった、「オールドネットワーク」と「アドヴァンスドネットワーク」を起動、「アドヴァンスドネットワーク」で自宅のスパコンを利用してサーバーへ不正接続しました。雄英のパソコンを全部閲覧して不自然な行動を起こしている端末を捜します。頑張つて数秒で変な動きをした端末を見つける事が出来ました。

見ているのは今年の授業や行事の予定。それだけなら普通ですが、不自然なまでにオールマイトの授業に関する情報がそれまでに閲覧されていました。

接続を確認しつつ食堂の開ける事の出来る窓から飛び出ます。

「ごめんなさい! ちよつと急用が出来ましたので、少しショートカットします!」

「えっ、ダフネ!」

拳藤さんの驚いた声を余所に全力で外を走り抜けて職員室に向かいます。教師のパ

ソコンはそこ以外にありませんし、該当する端末がそこにありますからね。

時速100kmの全力ダツシュで近付き踏み込んでジャンプして職員室の窓の下にしがみつきます。

見た目がシニールですがしようがありません。推測が正しければこつちが本命の狙いですから、少しは相手の事を知りたいです。

「…黒霧。そろそろ時間切れだ、帰るぞ。」

「ええ、戻りましょう。必要な情報は手に入りました。生徒の個性を把握できなかつたのは痛いですが、仕方がないでしょう。」

耳を澄ましたら二人の話が聞こえてきました。ちらつと顔を出してその姿を捉えま

す。
顔に手を付けた青年と、霧がかかった変な人（服装的に男ですね）がいました。その男から出てきた黒い霧が何やら渦を巻いて変な空間を作ると二人がそこに入り、消えま

した。まさかの転移の個性ですか。
ネットワークとの接続を切り、職員室の窓から離れます。

これはどうするべきか私には判断しかねます。あれが何の目的で行われた事で、あの二人が何者なのか不明すぎます。

心配してるであろう二人の下に走って戻りながら、私はどうするべきかを考えていま

した。

「全く、急に走り出していったからどうしたのかと思ったノコ!」

「急用って言ってたけど、もしかして今回の騒動で何かに気付いたの?」

急いで食堂の近くに辿り着くと、昼休みももうすぐ終わるのに二人が待つてくれました。

希乃子ちゃんは単純に私を心配してくれて、いなくなるまでの私の動きを知っている拳藤さんは何かに気付いた事に気付いたようです。

「…そう、ですね。単刀直入に言います。あのマスコミ侵入は囿です。あの時の隙に二人の人間が職員室に侵入、何かのデータを盗み見ていました。」

「え!?それって先生に言った方が良いんじゃない?」

「普通ならばそうかもしれないですね。ですが、これを不用意に先生に伝えるのもまた危険です。」

「…あの混乱状態の食堂に居た人間が職員室に侵入者が居る事を把握し、しかもその姿を目撃したと言つて、信憑性があると思いませんか?」

あれは計画的犯行でした。全てが予定調和のように進み過ぎていましたから、確証は持てませんがその可能性が高いと思っています。

何の証拠もない状態でこれは流石に勘繰りすぎだとは思いますが、最悪の場合、雄英高校の内側にスパイがいます。それを想定すると、この事実を伝える相手は慎重に選ぶ必要があります。

ほぼ100%安全なのはオールマイトでしょう。ですが今日は非番、会おうと思つてもどこにいるのか私は知らないですから駄目です。

次点では相澤先生です。あの人はヒーローを教える事に関しては極めて熱心ですから、少なくとも現時点で把握できる人柄ではかなり信用できます。

後の先生は関わりが少なすぎてどうとも言えません。

「…少なくとも相澤先生には伝えるつもりですが、信用できる相手にしか伝えない様をお願いするつもりです。」

希乃子ちゃんと拳藤さんも、この事は不用意に人に言わないでください。」

「分かった。ダフネちゃんが何を危惧しているのか分からないけど、多分重要な事なんだよね。」

…さつ、戻ろう戻ろう！もうすぐ予鈴がなつちやうからね！」

「えっ、もうそんな時間なんですか!? だったら二人とも無理してここで待たなくても…」

「友達が心配だから残って待ってたの。いきなり車の前に飛び出るような無茶な事はないで欲しいなあ。いなくなってる間何をしたのかの話聞いて余計心配になったノコ。」

速度を二人に合わせて走って教室に戻りながら希乃子ちゃんの言葉を聞きます。

確かに今考えると当時の私はかなり無謀な行動をしていますね。これからは心配させない様にもう少し自重を持たなければいけないですね。

その後、その他の委員を決める時に緑谷君からの推薦で委員長が飯田君になりました。

クラスメイトの「非常口飯田」呼ばわりにちよつと吹き出してしまいました。確かにあのポーズは非常口のピクトさんでしたね。

飯田君が相変わらず硬い動きで意思を表明しました。やっぱり飯田君は動きがカッコカクで个性的ですね。一人だけ f p s 低いみたいです。

放課後、私は廊下で相澤先生を呼び止めました。

「あ、あの。相澤先生。できれば人目のつかない場所で話したい事があるんです。」

「…ダフネか。分かった、生徒指導室で聞こう。あそこなら中々人が入ってこないだろうからな。」

相澤先生について行って生徒指導室に入ります。

椅子に座ってから相澤先生から話を切り出してきます。

「で？話したい事はなんだ？」

「そ、その…今日の侵入者騒ぎの話なんですけど。」

相澤先生が少しだけ動きます。

「…あれはマスコミが殴りこんできただけだ。そこまで大変な事は…」

「違います、そうじゃなくて…まず、謝らなければならぬ事から言います。」

私、一時的に雄英のパソコン全部にハッキングを仕掛けて動きをモニタリングしてきました。」

「…何故だ？何の目的があつてそんな事をした？」

相澤先生の目が怖いー!!やった事は確かにこんな目されてもしょうがない事ですけど怖いです！

「マスコミは囷で、本命は別にあるんじゃないかって思いましたから…とりあえず現時点で狙われる可能性があるのは人か情報だと思つて。」

人だったら私じゃどうにもできませんから、とりあえず不審な動きをしてる端末を捜す為にしました。

そしたら、一つだけあって。急いでその端末の場所に向かって、何をしてるのか覗き見したら…：いたんです。明らかに生徒でも教師でもない人が。」

「…：…：…：その見た目は覚えてるのか?」

「はい、一人は「黒霧」と呼ばれた黒い靄に覆われた頭をした転移系の個性の人で、もう一人は名前はわかりませんが、顔に手を付けた男の人がいました。」

相澤先生は紙に特徴を書き込み、顔を上げました。

「分かった、情報をありがとう。」

…：だが、いくら疑念を確かめる為でも学校にハッキングを仕掛けるのは駄目だ。

今回は情報提供の礼代わりに不問にするが、次があると思うなよ。」

相澤先生に鋭く見られて思わず肩を震わせてしまいます。

「は、はい…：それと、もう一つ。」

出来ればその情報は、信頼できる人のみに開示してください。本当に最悪の場合を考えたら…：」

「…：内通者がいるかもしれない、からか? ほぼありえない話だが、念の為信頼できる人間の上に話す事にしよう。」

「ありがとうございます。私の話はこれだけです。聞いてくれてありがとうございます。聞いただけです。聞いた。」「」

相澤先生が頷いてくれたのでほっとします。

そつと外に出ようとドアに手を掛けたところで相澤先生が思い出したように呼び止めました。

「そういえば雄英体育祭が今日から大体2週間後にあるんだが、一年ステージの宣誓は入試の総合1位、つまりお前がやる事になる。

だけどお前は内気だからな、無理だと思つたら言つてくれ。爆豪に代えるからな。」「…か、考えておきます。」

え、マジですか。選手宣誓を私がやるんですか。

と思つたら私の性格を鑑みてくれたのか無理そうだったら変えてくれるそうです。相澤先生つて案外優しいところは優しいですね。

「…それと、今日みたいな行動は自分の墓穴を掘りかねないから程々にしとけよ。」

あ、はい。分かりました…衝動的行動は慎まないとですよ。

そうして生徒指導室を後にして、校門で待つていた希乃子ちゃんと今日の帰路に就きました。

【レスキュー訓練…の前に乱入者です】

「今日のヒーロー基礎学、何故かお姉さまにたくさん武器を渡されたんです。なんででしょう?」

「お姉さんは次もまた戦闘訓練だと思ったんじゃないかな? 相手を本気で殺りに行けて意思表示かもしれないよ」

「それが事実だったらお姉さまは全く容赦がない事になっちゃいます!?!やるの漢字が絶対「殺る」になってますよね!?

……いや、実際お姉さまは容赦がないから意義的には間違っていないかも。実際幾つか殺意満点の武器ですし」

「ダフネ、結構姉に辛辣だね……」

「嫌われてるわけじゃないっぽいけどお姉さんが可哀想ノコ」

翌日です。私は拳藤さんと希乃子ちゃんと物間君とご飯を食べています。

物間君とは色々あったせいかわ昨日は話せなかつただけど、案外話してみると普通にいい人です。話し上手で聞き上手と言いますか、言い方がアレですけど気づいたらうまく口車に乗せられてると言いますか。

「ちなみに、参考までに何を持ってきたのか聞いても良いかい？」

「えーっと、アサルトライフルの【Da^ダfine^フ003^ネ】とレールガンの【Li^リa^アfa^フil^ル】、スナイパーライフルの【Re^リe^イD^デI^イA^アS^スP^ポO^オR^ラA^ラ】。後は実体ブレードの【秋^{あき}茜^{あかね}】と【蜻^{かげろふ}蛉^る】、バトルハンマーの【Ba^バll^ロl^ル】ですね。ちなみに実弾を待たされました。非殺傷弾頭の方が比率は多いですけど。

ちなみに全部は一度に持ってませんし、特にリア・ファルを撃つためにはガチ装備が前提の為に今回はタイプBの戦闘服になります」

「本当に殺しに来てる装備だ!?!それにしれっと超技術持ってきたね!?!」

「え、お姉さまに聞いたら『私の知り合いはライトセーバーを敵に向かってぶん回していた事があるわあ、「使い辛い」って言ってさっさと捨ててたけど』って言ってましたよ？」

「そもそも私自身超技術の塊じゃないですか」

「君のお姉さんは技術レベルが馬鹿みたいに高い修羅の国の出身なのかな!?!」

物間君が私に向けて全力で突っ込みます。なんか私がお姉さま関係の話をすると聞き手が大体ツッコミ役になりますね。なんででしょう。

「……あの、もしかしてお姉さまでももしかしてここじゃ変な人の部類でしょうか?」

「「相当変な人だね」」

「まさかの異口同音!?!」

三人から肯定されました。ではお姉さまの常識は何処で培った物なんでしょうか。

「対人、というかまず訓練にそこまでの兵器を持ち出すのはおかしいと思うね。どう考えても拳銃のモデルガンと木刀で済むでしょ」

「ていうかまずバールを訓練に使うこと自体おかしいノコ。バールどんだけ好きなの」
「特にそのレールガンを持つてくにも使つたらまず間違いなく会場ごと相手が粉々になるから、実際に使うのはやめた方が良くと思う。」

流石に雄英でも超火力武器をぶつけに行くとは思ってないだろうし」

三人から口々に言われて、なんだかお姉さまが色々ヤバい人に聞こえてきました。お姉さまは何を考えてこれを渡したんでしょう。

昼ご飯を食べ終えて、教室に戻って相澤先生の説明を受けます。

「今日のヒーロー基礎学は俺を含めた三人で見る事になった。」

内容は災害や水難から人々を救助するレスキュー訓練。コスチュームの着用は個人の自由だ」

……本当にお姉さまはなぜこれを渡したんでしょうか？

その後、装備を変えてバスの近くへ行きます。タイプBの戦闘服は受験の時のようなファンタジー的な話で旅人が良く着ているアレを戦闘前提用に素材を変えた物です。

薄いベージュ色ですので、砂漠辺りでも旅してるんですかね。

非常口飯田君（ツボった）は委員長になって張り切っているのか安定のかくかくした動きで皆を仕切っていました。バスの構造のせいであまり意味がなかったですけど。

私は一番後ろの端の席に座ります。隣の席にはマウントできなかつた武装を入れた高さ3 m程の大きさの荷物を斜めにして置きます。

「……おい。お前、救助訓練なのに何を持って来てんだ？」

そうしたら、前の席に座つてた髪の毛が赤と白で半分になつてる子、確か轟君が振り返つて聞いてきました。いきなりだったのでもちよつとビックリしながら答えます。

「あ、お、お姉さまから今日のヒーロー基礎学に持つてけと言われたものを……なんでこんな物武器を持つて行けと言つたんでしようか」

「さあな……姉に聞かなかつたのか？」

「『必要だから』としか答えてくれませんでした……」

律儀に答えると轟君は「そうか」とだけ言つて前を向きました。何が聞きたかつたのでしょうか？

そのころ手前の方では爆豪君が色々言われてました。笑えますね。

「すっげー！USJかよ!」

あなた達はUSJを何だと思ってるんですか!?思わず心の中で突っ込んでしまいました。

いや、確かに広場辺りはそういう感じあります。でも燃えまくってる市街地がUSJに会ったら地獄ですよ!?

……あれ、でも水没した世界はあったから案外セーフなんでしょうか?

まあこのの正式名称は「ウソの災害や事故ルーム」で略すと本当にUSJなんですけどね。

「……まあこの辺について考える事は無駄ですね、やめましょう」

そんな事を考えている内に13号先生が来ます。

相澤先生と何か内緒話をした後、私達の方に向き直りました。

「えー、それでは訓練を始める前に皆さんに言うておくことが一つ……二つ、三つ四つ……」

(増えるんですか……)

そうして13号先生は私達に向けて説明を始めます。オールナイトがまだ来ていないのか居ないみたいですけど、どうしたんでしょう。何かやむを得ない事でもあったのでしょうか。

「僕の個性は『ブラックホール』。どんなものでも吸い込んで塵にしてしまいます」
「その個性で、どんな災害からも人を救い上げるんですよね！」

緑谷君、凄くキラキラした目ですね。あと、近くの麗日さんは凄い速度で領いていきます。ファンなのでしょうか？というかあの速度で領いて良く脳震盪になりませんか。

ですが13号先生はそれに対して慎重な感じで答えました。

「ええ、ですが簡単に人を殺せる力です。」

……一歩間違えたら人を容易に殺せる『個性』をそれぞれ皆が持っている事を忘れてないでください。

君達の力は人を傷つける為ではなく、人を救ける為にあるのだ、という事をここで心得て帰ってくださいね」

私には痛い言葉だなあ、と思います。

いつもの日常の四肢でもアサシンブレードが格納されていて、組み替えればただ全力ダッシュで走り抜けてぶつかただけで致命傷を負わせる事が出来て、しかも活動に利用されている「ジオアド粒子」は普通の人体には有害だと来た。その為付近に人が居る状態、というか付近に生物がいるにないに問わずそこが生命の生活圏である限り、私は本気を出せない。

お姉さまに耳にタコができる程言われました。「生命が存在する、或いはそこが生命

体、特に人間の生活圏である限りジアドスフィアは起動するな」。

お姉さまの言葉を思い出す作業は、一つの変な音で遮られる事になります。それは例えるなら死体が臓物を引き摺りながら這いずり回っているようで、私に不快感を与えます。

音の方向を見たら、その理由はわかりました。いつか見た黒い渦が、広場の噴水前にあるのですから。

「ひとかたまりになって動くな!!」

皆が相澤先生の言葉に固まる中、私は反射的に鞆に手を突っ込みます。

そう言っている内に、霧は広がり、中から沢山の敵が湧いてきます。

「何だアレ、受験の時みたいな既に始まっているパターンか?」

切島君が不思議そうに声を上げました。相澤先生の言葉の迫力を聞いて分からないでしょうか。

私は以前見た事があるので言われる前に何者が来るのか予測できましたし、相澤先生は経験からかすぐに全員に指示を出しました。

私は鞆から「ReeDIA SPORA」を取り出します。

SSAなる企業が生み出したスナイパーライフル「DIA SPORA^{ディ}4^ア2^ス」をC3ア
ンダーグラウンドという場所が独自に改良したスナイパーライフルです。

私が武器を取り出したのと未だに良くわかってない生徒達を見て、相澤先生が改めて声を出しました。

「動くな!! あれはヴィランだ!」

そして、後ろの方で霧から姿を現した四人に目を凝らします。その中でも二人は見た事がありますが、残り二人は見た事ありません。

黒霧と呼ばれる霧人間と、手がたくさんの人間。そして、筋骨隆々な脳みそ? き出しな黒い人間(?)。

最後の一人は異質だった。仮面で顔を隠していて、闇に溶け込むように黒いコートを着ていた。それだけ見ればヴィランとしか言えないでしょう。

でも、その丈だけ見るならば、どう見てもヴィランじゃなくて子供です。性別はわかりませんが、背丈だけで推測するならば10歳から17歳の間と言ったところですよ。

「どこだよ……せつかくエンブリオにも援軍を頼んで大衆引き連れてきてもらったのにさ……オールマイトが、平和の象徴が居ないなんてさ」

手ばかりの男が喋りました。

狙いは、オールマイトという事でしょうか? いきなり狙いを明かすなんて何のつもりでしょうか。

「……生徒を殺せば、来るのかなあ?」

手だらけ男がそう言いました。

子供の純粋な好奇心のような無邪気な悪意が、その顔にくつついた掌の隙間から零れました。

【敵との戦闘です。】

「ハア!? ヴィラン!? ここに襲撃仕掛けて来るとかバカだろ!？」

切島君が声を上げます。まあ仮にもトップクラスのセキュリティを備えてる雄英高校を襲撃してきたら普通そう思いますよね。

これが計画性の無い犯行でしたら私も同様の感想を抱いたと思います。

「これは計画された奇襲だ、馬鹿だがアホじゃねえ」と轟君が冷静に分析しました。周りの情報をきつちりと読んでいます。推薦組つてやつぱり優秀なんですね。

つまり相手には先程聞いた（遠くて聞き取り辛かったせいで確実にそうだったかは怪しいけど）目的である平和の象徴を殺す算段があるという事になります。

一番あり得るのは見た目が既に筋肉モリモリマッチョマンの変態で、他三人は外見だけ見ればオールマイイトに勝てる要素は見当たりません。

「13号……ここは任せたぞ!」

相澤先生が私達を13号先生に任せて敵達のご真ん中に突入しました。

凄いですね。視線を隠すゴーグルと特別製の布を利用した戦闘法は大量の敵を相手に全ての攻撃を捌き切っています。

私が相澤先生の戦闘を見つめてる間に飯田君を含めた何人かが脱出しようとし、上鳴君は通信を試していました。

同時に私は少し人の声が聞こえた気がしました。何故でしょうか？

「やせませんよ」

気味の悪い音を背後から聞いた瞬間、反射的に非殺傷弾頭を装填し振り向き構えま
す。

「初めまして。我々は敵^{ツイン}連合。

僭越ながらこの雄英高校に入らせていただいたのは、平和の象徴……オールマイトに
息絶えて頂いてもらいたいと思ひまして」

わあ、ご丁寧に教えてもらってありがとうございます。

お陰でこっちもやりやすくなりました。

「本来ならばこちらにオールマイトがいらつしやる筈でしたが、何か変更があったので
でしょうか？

……まあ、それとは関係なく、私の役目は……」

黒い霧を私達を覆う様に展開しました。

足止め、或いは分散からの各個殲滅が目的でしょうか？

「その前に俺らにやられる事は考えて無かったかア!？」

「駄目です！どきなさい、二人とも！」

広がる前に本体に切島君と爆豪君が同時に攻撃を仕掛けます。

13号先生が制止の声を発する前に攻撃のモーションに入ってしまった為、止まらずに攻撃してしまいました。二人の息は綺麗に合っていて、攻撃も相手が普通の人間ならばきつちり当たっていました。

ですが、何ともない様子で黒い靄が私達を覆います。私は鞆を持って横っ飛びに飛んで外に逃げ出し、何とか間に合いました。

「上鳴君!!通信機は常に起動したままにしてください!!」

「うえっ!!?そりやどういう意味——」

上鳴君に伝えられましたが、最後まで会話は出来ませんでした。靄が晴れると、そこに居た人数は4分の1程度に減っていました。

足の速い飯田君や飯田君が抱えて助けた人など、数人だけが残っています。手の内の銃を握りしめて相手に話しかけました。

「確か……黒霧、そうあの手だらけ男に呼ばれてましたっけ。個性は転移系統、恐らくその靄がワープの起点で、終点には靄が渦の形状を取って、多少の時間差を置いて飛ばされると言ったところですか」

「おや、私を知っている……もしかやあの時、傍に居たのですか？」

その質問には答えず、「Re—D I A S P O R A」を黒霧に向けて発砲します。あの個性の能力では望み薄ですけど。

案の定私の背後に銃弾を転移させてきました。振り向かずに無造作に片手で掴み取ります。非殺傷弾じゃなかったら到底無理な芸当でした。

「私に銃火器の類は下策ですよ」

「ダフネ！無策に撃つのはやめて下さい！

……飯田君、君はここを脱出して救援を呼んでください。君の個性が一番脱出に適しています」

13号先生が飯田君に脱出して救援を呼ぶ係を任せました。飯田君は抗議しましたが、最終的に13号先生の説得で受け入れました。

私達は飯田君の脱出を援護する事になります。飯田君とほぼ等速で動ける私は脱出直前まで飯田君に並走し、黒霧の妨害から守る係を任せられました。

バッグから比較的取り回しのいい「D a f n e 0 0 3」^{ダフネ}と「蟬蛸」^{かげろう}を取り出します。「敵の目の前で作戦会議する余裕があるのですか？」

「しても問題ないから、やってるんでしようが!!」

13号先生の啖呵と共に私と飯田君が駆け出します。

13号先生が黒霧の靄を吸い取って足を止めている内に4分の1程を走り抜けます。

後ろから麗日さんが13号先生を悲痛な声で呼びました。

私は首だけ後ろに向けて状況を確認すると、13号先生が背中からボロボロになっていました。恐らく黒霧の前の空間と13号先生の背中側の空間を繋げたのでしよう。

つまり、私達の障害が本格的に動き始めたという事です。

非殺傷弾を装填した「Dafne003」を飯田君の後ろから足元を撃つて目の前に出て来ようとした黒霧を妨害します。その間に障子君が黒い渦を掴んで覆い隠して、飯田君が方向転換して更に走ります。

私は障子君ごと黒霧を飛び越えて飯田君が後ろ、私が前に入れ替わります。

「やっせません……!!」

妨害を超えてきた黒霧が私の前に立ちます。目の前に3発撃つた直後に方向転換して3発を背後に発射、更に回転して黒い渦を避けて3発を撃ちます。

最初の3発は黒霧に転移させられましたが、直後に打ち出された3発で全て迎撃し、最後の3発は2発回避されましたが、1発は黒霧に命中しました。

「くっ……!」

体勢を崩した黒霧に【蜉蝣】で追撃を仕掛けます。その追撃に気を取られている間に飯田君はドア直前まで到達しました。

転移させようと靄を伸ばしますが、麗日さんと瀬呂君、13号先生の連携で阻止され、

無事に飯田君を外に逃がす事が出来ました。

黒霧は「ゲームオーバーですね」と言い残して広場方面に転移しました。

一度放置でもいいのでしょうか。

その時、通信機にからピンチになった音声が届いたので靴から取り出して「Lia Fail」を組み立てます。通信機使ってる本人が何故かウエイウエイうるさいですけど、なんででしょう。

「A-Carlotta」の右腕を利用し、構えたレールカノンは300m以上先も狙い撃てます。特に私はこれで1kmスナイパーをできます。砲身に向けるのは山岳ゾーン。

「超長距離ジアド粒子通信」なんて、いつ上鳴君の通信機に組み込んだんですか……」

「え、ダフネちゃん、そのデカイ砲台……何なん？」

麗日さんが私の用意した「Lia Fail」を見て声を上げます。

「Lia Fail」。全長12mのレールを備えたレールガンです。ちなみにレールガンである以上他の手持ちとは違って実弾以外は撃てません」

「え……そ、そんな撃つたら人が死ぬやん!？」

「相手は既にこちらを殺す気で来ていますよ？それを相手に躊躇していたらこっちが殺されます。そうお姉さまに教わりました。」

最近お姉さまが世間的には異常な方である事を知りましたけど。

「……まあ、死なない様に手は尽くします。何せ、どっちにしろ外してはいけない一撃なので」

私は麗日さんにそう言つて通信を切り替えます。

正直なところ「撃たれる前に撃て」つていうのはヒーローというよりはヴィラン的な思考回路な気がしますが、ヒーローよりもヴィランの方が打てる手が多い以上選択肢には入れなければいけない物だと思えます。

『上鳴君、言葉はわかりますよね。』

決してそこから動かないでください。最悪の場合死にますから』

『ウエイ!?!』

【L i a F a i l】の砲撃の準備を始めます。お姉さまに教えてもらったジアドスファイアからジアド粒子を漏らさずに電力を使う兵器を使用する方法。

内部でジアド粒子の動きの全てを完結させるといふ簡単な手法です。高性能なジアドスファイア製波装置を利用する事でやつと使えるようになりました。

「……ジアドスファイア、限定起動。外部に漏洩しているジアド粒子が0である事を確認。動力の作動に問題なし、【L i a F a i l】との回路連結完了。弾薬装填、砲身への送電を開始します」

レールの間に放電が走り始めました。ところでこれって見た目からしたらかなり異常ですよ。150cm後半の少女が12mの砲身を備えたキャノン砲構えてるってどんな絵面してるんでしょう。

発射以外の準備が完了した為、私の持つ全てを駆使します。

「スカザツクの知慧」、【強化生体受像機】、【思考活性】、【ウィザードブレイン】。照準固定……撃ちます」

打ち出した銃弾は、全ての音を置き去りに山岳の先、捕まっていた上鳴君と動けなかつた八百万さんと耳郎さんを傷つけず、過たず敵の足をもぎ取りました。

序でに言うのと、帯電した銃弾から僅かに電流が流れて上鳴君をいつもの状態に戻しました。

……あれ、これってこんな威力でしたか？

『……うおおおい!!ダフネお前、オレ死ぬかと思ったぞ!!足元に音より速く来るレベルの速度の弾をぶち込むのやめてくれね!』

つかどれだけ力が籠ってんだコレ!?敵の足がガチで跡形もねえんだけど!』

良くオレの足無事だったな!』

『……掠る程度にしたはずなんですが……あああ!!思い出しました!これ、そういえば移動する要塞用でした!』

あ、あわわ……や、ヤバいです、お姉さまに全責任ぶつけましょうか!? このままだと相澤先生に殺されます!』

『責任を押し付けるとかお姉ちゃんが可哀想じゃねえ!?』

『Lia Fail』持つてけつて言つたのお姉さまなんですよお!! まさか威力がそのままな^{デチューンしてない}んで思わないじゃないですか!?!』

悲痛に叫びながら通信で上鳴君と会話します。全部終わった後で気づきましたが、これ完全に相互が通信できる事の報告を忘れてますね。

傍から見たら阿鼻叫喚の七面相してるだけのカオスな絵面ですよ。

『そ、そうです! そっちに八百万さんと耳郎さんが居ますよね!? その二人をどうにかして目を離させて、その隙に敵に全弾撃ち込んでうまく証拠隠滅を……!』

『やめろやめろ!? 今二人がお前が撃つたせいで気絶した敵の止血してるから! まだお前がやったつてバテてねえし似た個性のオレがどうかして言いくるめるからさ!?!』

『じゃ、じゃあこれは相手の個性がなんか暴発して自爆した事にしましょう! 私は何もやってないつて事にします!』

上鳴君は二人を上手く言いくるめるのと、私は「Lia Fail」を撃つた形跡を消そうとするので大慌てな状態でした。

その間に相澤先生がピンチに陥ってる事に気付けない程に。

【広場の戦い】

時はダフネが「L i a F a i l」を撃つ数分程前、生徒達がU S Jのあちこちに散り散りに飛ばされて少ししたあたりの時点まで遡る。

相澤は相変わらず多数のヴィランを相手に戦闘していた。まだ戦闘が始まって数分であるが、既に10人以上の人間を気絶させていた。

「フツ……い」

首魁と思しき手だらけの人物まで接近できるように道を開き、その道を走り抜け、肘を鳩尾に叩き込もうとした。

だがその腕は敵に届く事なく間に割って入って来た仮面をつけた黒コートの子供に阻まれた。

「……はあ、エンブリオ。お前が掴んでどうすんだよ。俺の方が掴んだ時にダメージ与えられるだろ」

『これは失礼しました。ですが防げるとわかっていても見ているだけというのは少々流儀に反するのですよ、弔君』

片手で首筋を掻きながらぼやく弔に、防御した体勢のままボイスチェンジャーを通し

たような機械的な音声で答える。

ボイスチェンジャーを使っているせいで性別も素性も分からないが、肘鉄を片手で難なく受け止めたエンブリオを相澤は要注意として記憶する。

蹴りを入れつつ距離を取り、捕縛布を投げて牽制する。

『おお、布ってこんな速度で投げられるんですね。驚きました』

「敵に褒められても嬉しくないな……それに、当然の如く避けながら言うのは挑発か？」
『まさか、そのような事は決して。私の手駒にそういう芸当が得意なモノはいませんし、それを目的とした手駒を作った事ありませんので』

自分の部下の事を仲間と言わずあくまで手駒と呼ぶエンブリオに相澤は多少の不快感を感じると同時に「手駒にする」ではなく「手駒を作る」という発言に疑問を覚えた彼は牽制を続けながら相手の情報を引き出そうとする。

「……手駒にするではなく手駒を作る、か。随分と悪趣味な言い方をするもんだな」
『ええ、だって事実として作ってますからね。』

「……ほら、まだ眠るには早いでしよう。早く起き上がってその人間を無力化しなさい」

エンブリオの言葉に従う様にさつきまで気絶していた筈の敵達が起き上がり始め、相澤に飛び掛かり始める。

知性の無い獣のような動きに相澤は顔を顰めて迎撃する。

『……おやおや、貴方達を理性のないレギオンにしたつもりは無かったです……少々弄りすぎましたかね？』

常人ならとつくに気絶していてもおかしくない攻撃を何発も受けても平然と動き続ける敵達とエンブリオの発言を受け相澤は何か細工をしたと理解する。

「お前、こいつらに何をした!？」

『何って……わかりませんか？気絶しない、骨を折られても問題ない、かつ人の姿をしたまま人を超えた身体能力を持つ生物……生物？アレを生物と呼んでいいんですかね？』

まあ一応生命体は使われてるからセーフですかね。そんな感じの物をご存じないのですか？』

相澤は理解できないという様に首を振る。そんな生き物に覚えはない、とでも言いたげなジェスチャーに少し苛立ったようにエンブリオが弔の方を向く。

弔はまた首を掻き、気だるげに答えた。

「……はあ……答えてもraisenないからって俺に振るのはやめろ。ぶっちゃけて言うとお前の言い方じゃ伝わらないんだよ。

こいつが今操っているのはアンデッド或いはゾンビと呼ばれる存在だ、生物というよりは怪物の方が呼称としては近いからな」

『なんという事でしょう。まさかの生物呼びがいけなかつたんですか。アレを生物と呼ばなければ何と呼べばいいのですか？』

「怪物だろ」

『辛辣ですねぇ……』

弔に冷たい対応をされたせいで目に見えて肩を落とすエンブリオに毒気を抜かれつつも相澤は身動きが取れないようにアンデッドと呼ばれた敵を縛る。

それを見て取った弔がエンブリオに問いを投げる。

「全く、先生が信頼してるからお前に手駒を頼んだのにあっさり手駒がやられてるじゃん。

何でもっと強いのを連れてこなかつたんだよ？」

『手持ちの素材を利用するより効率的だったので貴方が集めた人間を利用しましたが、時間が無かったので付け焼刃の理性を付けたホラーしか作れなかつたのですよ。

お陰でブラウン管テレビみたいに脆いクソザコホラーになってしまいました。

……それに』

相澤が話している二人に捕縛布を投げる。

だがまっすぐに飛んで行ったその布は突如として空中で動きを止め、エンブリオが振り向きざまに腕を振った次の瞬間に細切れにされた。

『ここには私がいまいますので。』

もつとも、実戦は久しぶりなので多少腕が落ちてくるかもしれませんがね』

袖から極細の繊維、【単分子繊維】がその姿を見せた。相澤はその繊維が布を切断したのだろうと予測し、その鋭利さを警戒する。

特殊繊維入りの捕縛布を容易く切り裂く繊維など警戒対象以外の何物にもならない。

『あ、脳無は温存してくださいね？万が一があつては困りますから』

「……うるさいなあ、言われなくても分かつてる。此処はお前に任せればいいんだろ？オールマイトが来るまでにそいつを殺すか何とかして無力化しとけ」

『はいはい、了解しました。未来の帝王殿の仰せのままに』

目の前で交わされる会話から敵が死柄木を旗頭として活動していて、脳無と呼ばれる者が隠し玉である事が分かったが、相手は相澤を潰す気で来るらしい。

その場合あの切れ味の高い繊維をどうにかする事が先決だと読み、相澤はインファイトでの接近戦を挑む。

エンブリオが接近を拒むように振るつた繊維を回避し肉薄する事で腕を振るいにくくする。

『なるほど、長物相手に間合いを詰めるのは確かに有効ですね』

エンブリオは繊維を投げ捨てて相澤の腹部を狙つた掌底を片足を踏み出しながら左

足を後ろに引いて半身になる事で受け流し、腰や足の動きで発生した運動量を余すことなく腕に伝え掌底に集めてカウンターを返す。

俗に言う中国拳法の技の一つ「発勁」と呼ばれる技術であり、エンブリオが成したカウンターは全体的に武術の心得のある人間の動きである、と接近戦に直接関係する個性ではない故に自身の身体を鍛えて敵を倒して来た相澤はその一撃で理解した。もう片方の手のひらで防いだが、発勁の衝撃が肩にまで響き、右手の橈骨に今すぐ使えなくなるほどではないが、ひびが入った事を相澤は直感する。

（発勁か……重心の移動から足から腕までの力の伝達まで無駄がない。武器を持っていないし体格や無理に距離を詰めない戦い方から徒手格闘はあまり得意ではないと踏んだが……こいつ、格闘戦までこなしやがる。

震脚や身体の使い方から中国拳法は一通り修めると考えた方がいいか？

小柄だが筋力はそのらの一般人よりずっとある。さつきから個性を抹消しているはずだが、何一つ変わらねえ。これで素の身体能力って事か）

単分子繊維を捨てた事で再び防がれなくなった捕縛布を投げて捕まえようとするが、ここでエンブリオが初めて仕掛けてきた。

『ずっと受け身で戦うというのもつまらない物ですからね。今度は私が攻めに行きます

』よ

布を躲しながら相澤の拳が届かないギリギリまで近づく。

そこで立ち止まり、周囲の縛られていたヴィランを自分の周囲に集めて左手を強く握り込んだ。それに呼応するように敵の身体が乱雑に丸められ、骨の折れた端が所々から飛び出た血の滴る棘玉が作り上げられる。

相澤は目の前で起こった人間の尊厳を鼻で笑うような行動に憤りを感じる。

その視線を知ってか知らずか、エンブリオは話し始めた。

『私の能力を一つ開示しましょう。』

こちらでは「個性」と呼称されている特殊能力が存在していますが、私のそれは原理が多少異なるようでした。

一般的にESP、と呼ばれるものですが、その中でも私はテレキネシスに秀でています。その辺の物体を高速で投げ飛ばす事も出来れば、こんな風に丸めて潰す事も出来ます。

残念ながら生物には使えませんかね』

「チツ……胸糞悪い奴だ。既にその球体を構成してる奴は元々死んでいるから関係ないって事かよ」

舌打ちをする相澤に不思議そうにエンブリオは首を傾げる。

『いえ、私だって即席とはいえ自分の作品をこういう使い方するのは嫌いですよ？』

ただ纏めた方が攻撃範囲が広がるのでそうしているだけです。だってこんな使い方してもパーツさえ残ってれば勝手に修復してくれますしね。

急造品でもその辺りの生命力は素直に認めてあげたいところです』

「……イカれてやがるな、お前」

嫌悪感を表すように相澤は顔を顰めて吐き捨てた。エンブリオは首を振ってその言葉に答える。

『ええ、イカれていますよ。』

悲しいかな、私はとうの昔に全部壊れてしまったのです。

きつと、私達はわかり合えない。生きてきた常識が違い過ぎたのですから。

私は貴方を殺しに行く、貴方は私を止めに行く。それだけが今の私達の関係を表すのですから』

そう言ったところで流星の如く一つの閃光が山岳ゾーンの方に流れて行った。

ダフネが撃った「L i a F a i l」だ。僅かに顔を閃光の通った軌跡に向けて、微かに笑いを漏らす。

『相変わらず容赦のない事で……』

それでは、こちらもしましょう』

その言葉と共に左手の拳を弾くように広げ、肉や骨の散弾が周囲にばら撒かれる。

味方にも飛び火しそうな一撃だ、と相澤は思いながら自身に向かってくる散弾がある時は叩き落とし、ある時は身を翻して回避する。

だが、気づけば散弾は左手を掲げたエンブリオを中心として相澤を逃がさない様に球状に回り始めていた。それらは地面に接触する度に地面を抉り取り、その破片を壁として取り入れていく。

次第に周囲の地面が割れ、大量の瓦礫が球形の壁へと集まっていき、彼女の手のひらの上に渦を形成した。

クラス「サイケデリック」の持つ敵味方関係なく巻き込む最凶の切札、元来は特化スキルである【破壊の渦】。

それが自己流にアレンジされ規模が強化された一撃はまさしく「破壊」の言葉が似合う瓦礫の渦となり、次第に一点へと収束し次の瞬間、圧力から解放され弾けるように力を受けた瓦礫達はエンブリオのいた場所を中心に、器用にも刃達を避けるように弾けた。

【破壊の爪痕】

突如として広場で響いた轟音に驚いた私は、ビククリしながらもその方向に目を向けました。

そこはさつきまでテーマパークのような風味を感じさせる綺麗な造りだったので、見る影もない無惨な姿になっていました。

「……何が起きたんだよ!?一瞬すげえ音が響いたと思ったら、広場がクレーターになってんじゃねえか!？」

瀬呂君が余りの惨状に大声を上げて私達の心情を代弁します。

それに、広場には相澤先生がいたはずですよ。爆発に巻き込まれてはいないでしょうか。

「……あ、待って!あそこ、クレーターの真ん中!人がいるんちゃう!？」

麗日さんがクレーターの真ん中を指差します。クレーターの真ん中という事からアレが元凶なのでしょうか。

なんだか変に表面が真っ赤っかな生々しい色をしています。身体が抉れてませんか、あれ。

「自爆したのか……？とにかく、相澤先生の無事を……」

障子君が相澤先生を見つめようとして個性によって索敵をしようとした時に、肉塊のようなものが微かに動きました。

【RE-DIASPORA】を鞘から取り出して不審な動きをしないか見張ります。

少しずつ動きは大きくなり、次第に翼を広げるように解けました。それらは肉や内臓、骨で組み上げられた悍ましい外見をしていて、見ている人間を気持ち悪くさせます。原型を留めていない程にグチャグチャになった左手を外した義手であるかのように持った仮面の子供が内側から現れました。

『ああ、やはり【破壊の渦】はデメリットが大きいですね。』

漸くある程度飛ばさない角度を選べるレベルまで制御を可能にしたのですが、自分も巻き込まれるのが残念なところですよ』

私達に顔を見せない様に器用に立ち位置を変えて、無造作にボロボロの左手に齧り付きました。

数口程齧った辺りで、左手が盛り上がり再生していきます。余りの悍ましい光景に私達が戦慄し立ち止まっていると、少し離れた手だらけの青年のところには黒霧が現れて何事かを話し始めます。

「はあ……エンブリオ。ゲームオーバーだ。」

生徒を一人逃した。このままじゃ他のプロヒーローもじきに来る」

『ええ？黒霧さん、何をしくじっているのですか？』

まあ、弔君の言う事には従いますけど……って、あら？』

エンブリオの左手に捕縛布が巻き付きました。相澤先生がエンブリオの動きを止めようと放った物でしょう。

『おや、もう気絶してるか死んでるかと思つたのですが……しぶといですね』

「……エンブリオ、撤退するからさっさとその布切り落とせ。」

……ああ、そうだ。せめて最後に、平和の象徴の矜持を地に落としてから帰ろう……！

そんな言葉と共に、彼がかなりの速度で水難ゾーンの方向に駆けていきます。

誰かいるのかと思ひそちに目を向けると、顔を僅かに見せていた蛙吹さん、緑谷君、峰田君がいました。彼らを害するつもりの方です。

構え方から恐らく触れる事が発動条件。発言から、触れられたらアウトなのだ何となく理解します。絶対に触れさせてはいけない、と引き金に指を掛けます。

でも突然の動きだった故に慌ててしまい照準がブレ、引き金を引く事が出来ませんでした。その隙に蛙吹さんの顔を掌が覆います。

ですが、何も起こりませんでした。

「……ハア、ホントカッコいいぜ。イレイザーヘッド」

手だらけの人間が話すその言葉から、瓦礫に遮られていてこちらからは確認できませんが、相澤先生が防いだのだろうと推測できました。

ですが、捕縛布が大きく引つ張られ、相澤先生が仮面の子の方へと引き寄せられます。よく見れば、体を捻りながら右手で力強く捕縛布を引つ張っています。

『おや、他人の心配ですか？私がいる場所でそれは危険ですよ？』

そして、左手に巻きつけられた捕縛布を外されると同時に相澤先生の顔面に掌底が打ち付けられ、吹き飛ばされた相澤先生は地面を二回バウンドして倒れ、仮面の子は追い打ちでその頭を無造作に踏みつけました。

相澤先生への仕打ちに麗日さん達が声を上げました。

「相澤先生!!」

「くそっ！どうにかできねえのかよ！」

『その貴方達、その無力感を忘れない事ですよ。無力感に打ちのめされ道を諦めるか、一層奮起し、更なる成長をするかは貴方達のその後の行動次第です』

「おい、エンブリオ。敵に塩を送ってどうすんだよ」

私達に聞こえるように仮面の子が声を上げます。

一種の激励とも取れるような言葉を手だらけの人が咎めるように言いました。

『ああ失礼、ですがこれは私の性分ですから。お人形遊びにも楽しみが必要でしょう?』
「チツ……」

「……っ！SMASHAHAHAH!!」

真面目な顔（多分）で回答するエンブリオに舌打ちしている間に緑谷君が不意打ちのような形で目の前の青年に殴り掛かりました。

意表を突いたからこそ完全に入ったと思えたその一撃は、しかし全身黒タイツで脳みそを曝け出した筋骨隆々な変な奴に防がれていました。

思わず緑谷君が声を困惑の声を上げます。

「なっ……」

「SMASHって……オールマイトのファンか?」

変な奴が緑谷君の腕を握りしめて逃げられない様にして、もう片方の手で握り潰そうとしました。

それと同時に、手だらけの彼は二人に個性を使おうと両手を使い触ろうとします。

私達はそれに反応できず、見ている事しか出来ませんでした。

緑谷君が焦った顔をした瞬間、緑谷君を掴んでいた脳無の腕が落とされ、高速で動いた影が緑谷君を救い出しました。序でに手だらけの人間の横つ腹にジュラルミンケースのようなものが突き刺さって体勢を崩し、峰田君と蛙吹さんの二人を狙った攻撃を妨

害しました。

「おい……脳無の腕を切り落として俺に攻撃するなんてどういふつもりだ、エンブリオ」よく見れば、緑谷君を助けたのは先程まで相澤先生を踏みつけていた仮面の子でした。

緑谷君を片手で抱えながら視線を（仮面で隠れているので恐らくですが）手だらけの人間に向けます。

『私がこの子を気に入っているから、では駄目ですか？誰だってお気に入りの物を傷つけられるのは嫌でしょう。』

だから助けた、それだけです』

平然とエンブリオ、と呼ばれた仮面が答えます。

いつの間にか空いている手には極細の繊維が握られています。

よくわかりませんがあの繊維で脳無とやらの腕を切り飛ばしたという事でしょうか。

「お、お気に入りに入り……」

緑谷君が抱えられている状態から抜け出そうともがきます。

抜け出そうとしているのに気付くと、エンブリオは割と素直に彼を開放しました。

エンブリオの立ち位置が不明瞭すぎる、と思いました。手だらけの人の味方かと思えば、お気に入りに入りの人が危なかったら一時的に敵対しても守る。

『まあ一番近い言葉で言うなれば一目惚れのなアレですよ、私だって選り好みはしますから。』

……あ、米の品種じゃないですからね。ところで私の感覚で急加速してしまいました。が、どこか不調は無いですか？

臓器がダメージ受けてたりしませんね？』

エンブリオの緑谷君への心配と謎の補足で緑谷君の顔に一瞬弛緩した空気が流れた時、私達の後ろにあるドアが轟音を上げて吹き飛びました。

振り返ってみたら、そこにはオールマイト先生がスーツのまま、怒りの表情で立っていました。笑顔とポンコツっぽさで授業中は気付きませんでしたけど、笑ってないとめっちゃ圧が怖いです！

「もう大丈夫……私が来た」

手だらけの人はその声を聞いて、ゆるゆると私達のいる場所、入り口周辺へと顔を向きました。

「ああ、コンテニューだ……っ!？」

不吉な雰囲気を感じたので、淡々と左足首を手に持っていたのを構え直した実弾の【RE—DIASPORA】で撃ち抜きます。

なんで襲撃して振り返りにされかけてる側があんな余裕ぶっこいていられるんで

しょうか。不思議ですね。

「クソツ！脳無！その俺を撃った奴を殺せ！」

え、私にロツクオンですか。急いで「Re—D I A S P O R A」を非殺傷弾のマガジンに入れ替えた後に近くにいた麗日さんに放って、鞆から近接武器3つを出して鞆を遠くに投げます。

背中に「B a l o r」、手に「蜉蝣」と「秋茜」と言った風に装備します。

って足速くないですか!?!持ち替えてる間に間合いに入れるって、此処さつきまでの脳無の位置からかなり離れているはずですよね!?

咄嗟に体を逸らしてパンチを避けてカウンターを狙いますが、パンチの余波でする事が出来ませんでした。すると、私を庇う様にオールマイトが割り込み脳無にパンチを食らわせ、そのまま力押しで広場まで押し戻しました。

「大丈夫かいダフネ少女!……ああいや、さつきのは躲していたか。」

だが下がっていてくれ!君が相手の行動を狭める為に止むを得ずに撃ったのはわかるが、免許を持っていない一学生が実弾を発砲するのは流石に問題だ!」

「えっ」

((もう手遅れですオールマイト先生!!))

その発言に私は間抜けな声を上げて、「L i a F a i l」を撃つたことを知っている

周りの皆が心の中で総ツツコミをしました。